

高城町文化財調査報告書 第19集

高取原地下式横穴墓

個人農地陥没に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

高城町教育委員会



卷頭図版 高取原地下式横穴墓出土遺物

序

本報告書は個人所有農地の陥没により発見された地下式横穴墓緊急発掘調査の記録です。

1基のみの調査ではありましたが、豊富な副葬品の出土により、都城盆地における出現期の地下式横穴墓であることが確認されるなど多くの成果が上がりました。

この報告書が諸研究の材料となることはもとより、学校教育・生涯学習においてそれぞれの形で用いられ、地域に対する関心を深める手助けとなれば幸いです。最後になりましたが、多大なるご協力を賜りました各関係機関並びに町民の皆様方に心から深く感謝を申し上げます。

平成17年3月

高城町教育委員会
教育長 内 田 國 昭

例 言

- 1 本書は宮崎県北都農郡高城町大字石山3110番地で、平成14年9月12日から9月30日にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書である。
- 2 本発掘調査は個人農地陥没に伴うものであり、発掘調査から報告書作成にかけての一切の業務は土地所有者から高城町教育委員会が委託を受け、宮崎県教育委員会の指導のもとに実施した。また発掘調査にあたっては文化庁及び宮崎県教育委員会の補助を受けている。
- 3 本発掘調査の主体者及び担当者は次のとおりである。
主体者 高城町教育委員会
担当者 近沢恒典（高城町教育委員会社会教育課主事）
- 4 本報告のための整理作業は平成16年度に実施した。また平成14年度刊行の概要報告書において「石山高取原地下式横穴墓」としていた遺跡名を、本報告にあたり「高取原地下式横穴墓」と改称する。
- 5 調査現場における遺構の実測は作業員の協力を得て近沢恒典が実施した。遺構写真の撮影は近沢恒典が実施した。遺物の実測は橋本達也氏、藤井大祐氏、製図は下道愛子氏、甲斐康大氏、三好栄太郎氏に作製を頂いた。遺物の写真については橋本達也氏及び元興寺文化財研究所より頂いた。
- 6 本書の執筆及び編集は近沢恒典が中心となって実施し、橋本達也・藤井大祐両氏より玉稿を賜った。執筆の箇所については各文末に記載している。
- 7 調査及び報告書作製にあたっては土地所有者である前田勇氏の御協力を得たほか、次の種氏・諸機関の御指導・御支援を得た。御芳名を記して感謝申し上げます。（順不同）
矢部喜多夫氏（郡城市教育委員会）・横山哲英氏（郡城市教育委員会）
橋本達也氏（鹿児島大学総合博物館助教授）・藤井大祐氏（鹿児島大学大学院生）
下道愛子氏・甲斐康大氏・三好栄太郎氏（以上、鹿児島大学学生）
宮崎県教育委員会、宮崎県埋蔵文化財センター、郡城市教育委員会文化課
- 8 記録類や出土遺物は高城町教育委員会において保管している。また出土遺物については、平成16年度に文化庁及び宮崎県教育委員会の補助を受け保存処理を実施した。処理後は高城町郷土資料館に展示し活用を図っている。

本文目次

1	発掘調査に至る経緯	1
2	調査の組織	1
3	調査の方法及び経過	1
4	遺跡の立地と環境	1
5	層序	4
6	出土遺構	5
7	出土遺物	8
8	自然科学分析	20
9	まとめ	23
10	小考—高取原地下式横穴墓出土鉄鏃の意義—	24
	報告書抄録	29

挿図目次

図1	周辺遺跡分布図(1/50,000)	2
図2	遺跡周辺地形図(1/10,000)	3
図3	調査区位置図(1/100)	4
図4	土層図(1/40)	4
図5	遺構実測図(1/40・1/8)	6
図6	遺物実測図・鉄鏃 1(1/2)	9
図7	遺物実測図・鉄鏃 2(1/2)	11
図8	遺物実測図・鉄鏃 3(1/2)	13
図9	遺物実測図・鉄剣(1/3)	18
図10	高取原地下式横穴墓に関連する鉄鏃の諸例	25

表目次

表1	鉄鏃計測値一覧	16
表2	鉄剣計測値一覧	17

図版目次

巻頭図版	高取原地下式横穴墓出土遺物				
図版 1	遺跡遺景(東から)	3	図版 14	鉄鏃 16・矢柄先端部加工	15
図版 2	調査区全景(東から)	3	図版 15	鉄鏃 17,18・口巻き	15
図版 3	トレンチ中央ベルト土層堆積(西から)	7	図版 16	出土遺物・鉄剣	19
図版 4	竪坑土層堆積(西から)	7	図版 17	鉄剣 1 の分析箇所	20
図版 5	第二閉塞	7	図版 18	鉄剣 1 ・鞘木の木材組織	20
図版 6	第一閉塞	7	図版 19	鉄剣 1 ・付着布の実体顕微鏡画像	21
図版 7	玄室(上から)	7	図版 20	鉄剣 1 ・繊維断面のSEM画像	21
図版 8	鉄鏃 A グループ	7	図版 21	鉄剣 2 の分析箇所	21
図版 9	鉄鏃 B グループ	7	図版 22	鉄剣 2 ・鞘木の木材組織	21
図版 10	全景	7	図版 23	鉄剣 2 ・付着布の分析箇所	22
図版 11	出土遺物・鉄鏃	14	図版 24	鉄剣 2 ・付着布の実体顕微鏡画像	22
図版 12	鉄鏃 12・口巻き	15	図版 25	鉄剣 2 ・繊維断面のSEM画像	22
図版 13	鉄鏃 14・付着植物繊維	15	図版 26	鉄剣 4 ・鞘木の木材組織	22

1. 発掘調査に至る経緯

今回の調査は耕作中の土地陥没に起因する。平成14年9月、土地所有者より高城町教育委員会へ耕運機の操作中、畑が陥没したとの連絡があった。町教育委員会が現状を確認したところ、地下式横穴墓玄室天井崩落からの陥没である可能性が高いと考えられたため、土地所有者に耕作の一時中断を申し入れ、宮崎県教育委員会へと連絡、取扱いについて協議を行った。その後、県教育委員会立会のもと再確認した結果、地下式横穴墓の存在が確実であるとの結論に至り、土地所有者と再度の協議を行い、記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。(近沢恒典)

2. 調査の組織

高取原地下式横穴墓の調査組織は以下のとおりである。

(近沢恒典)

平成14年度(発掘調査)

主 体 高城町教育委員会
教育長 内田國昭
社会教育課長 江内谷満義
同課長補佐 中村敏和
同主任主査 佐藤潤子(庶務)
同主事 近沢恒典(調査)
調査作業員
黒木トミ子 岩永スズ子 窪田エミ子
庄屋幸子 馬籠恵子
指 導・支 援
宮崎県教育委員会文化課主査 飯田博之
都城市教育委員会文化課主査 矢野喜多夫
同主査 横山哲英

平成16年度(整理・報告書作成)

主 体 高城町教育委員会
教育長 内田國昭
社会教育課長 江内谷満義
同課長補佐 新地安弘
同文化係長 永峯キヌ子
同主査 小河原隆文(庶務)
同主事 近沢恒典(整理・報告書)
指 導・支 援
宮崎県教育庁文化課主査 飯田博之
鹿児島大学総合博物館助教 橋本道也
鹿児島大学大学院生・学部生
藤井大祐 下道愛子 甲斐康大 三好崇太郎
出土遺物分析
元興寺文化財研究所

3. 調査の方法及び経過

高取原地下式横穴墓の調査面積は約6.5㎡である。

平成14年9月12日、堅坑の検出より調査を開始した。堅坑を半掘し土層堆積状況を確認後、羨門を露出させ閉塞施設の記録を行った。また堅坑・羨門の調査と並行し玄室内の崩落土砂を除去し、遺物の検出を行っている。遺物は玄室内より鉄鍔23点、鉄剣4点が出土した。遺物の出土状況を記録した後、遺物の取上げを実施した。その後、玄室内を再び精査し、遺構記録の作製を行った。平成14年9月30日をもって全ての現場作業を終了した。(近沢恒典)

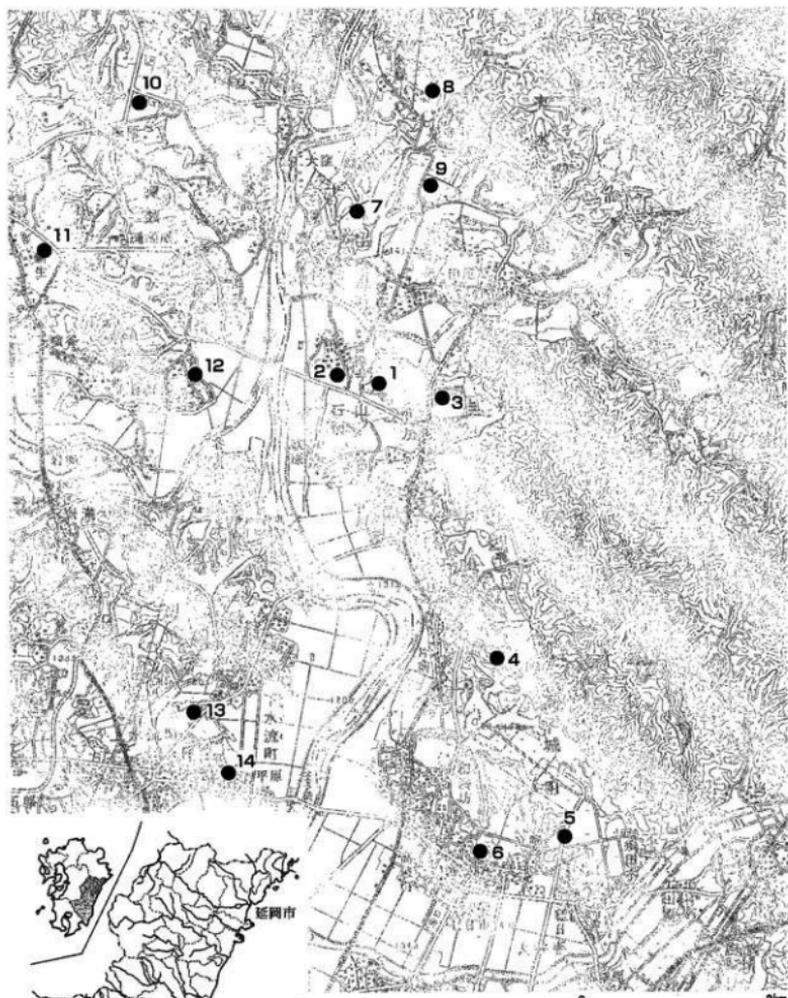
4. 遺跡の立地と環境

高取原地下式横穴墓は宮崎県北諸県郡高城町大字石山字柿木原に所在する。

高城町は宮崎県の南西部、都城盆地内に所在している。都城盆地は霧島火山群と鰐塚山地との間に形成され、鹿児島湾や大隈半島と宮崎平野とのほぼ中間にあたる。南北に細長い盆地内を大淀川が北へと貫流し、中央の低地を取囲むように成層シラス台地群、シラス台地群が発達している。高城町はその北東部に位置し、町域は南北24km、東西4～8km、総面積9,421ha。大淀川に沿い町南部から中南部にかけてシラス台地が発達し、大淀川が岩瀬川と合流し流路を東へと変える町北部は、九州山地と鰐塚山地との間に隆起し宮崎平野と都城盆地とを隔てる標高200～300mの小起伏山地となる。

高取原地下式横穴墓は高城町のほぼ中央、大淀川東岸に広がる神積平野と鰐塚山地から西に延びる山地の端部との間に形成された標高約150mのシラス台地上(高取原台地)の先端に立地する。

台地上には宮崎県指定史跡高城町古墳群3基があり、当地下式横穴墓の南側には同16、17号墳が位置している。また詳細は不明であるが、昭和40、50年代の農地整備に伴い多数の地下式横穴墓が出土し、数基の調査がなされたとの役場職員の話もある。台地下の神積平野には昭和33年に調査が実施され、地下式板石積石室、地下式横穴墓各1基を検出した香禰寺遺跡が立地している。地下式板石積石室からは鉄剣の柄部、矢柄、土器片が出土し5世紀代の築造と想定されているほ



- 1 高取原地下式横穴墓 2 香押寺遺跡 3 鳥井原第2遺跡 4 城ヶ尾遺跡
 5 牧ノ原遺跡群 (高城牧ノ原古墳群) 6 高城城址 (月山日和城城址)
 7 上原遺跡群 8 山城第1遺跡 9 下野遺跡 10 高崎塚原古墳群
 11 原村上地下式横穴墓群 12 横尾地下式横穴墓群
 13 築池地下式横穴墓群 (志和池古墳群) 14 平原地下式横穴墓群

図1 周辺遺跡分布図(1/50,000)

か、都城盆地における唯一の出土例であると共に、その分布域の東端にあたるポイントとなっている。地下式横穴墓は平入り片袖隅丸方形の平面形を呈し、羨門部には石閉塞が確認され、鉄剣、鉄鎌が出土している。

周辺の遺跡としては、有水川を挟み北へ約1.7kmの成層シラス台地上において、平成4年度に調査が実施され縄文時代後晩期、古墳時代の住居址群が確認された細井地区遺跡群が所在する。高取原台地より南へ約5km、東岳川北岸の台地上には前方後円墳3基、円墳10基からなる牧ノ原古墳群（県指定史跡高城町古墳群）を含む牧ノ原遺跡群が形成されている。昭和41、43、51年度、平成15、16年度の調査により箱式石棺6基、木棺直葬墓1基、土壘墓1基、地下式横穴墓16基が出土し多様な墓制の展開が確認されている。これら町内の遺跡と共に、大淀川対岸には高崎塚原古墳群（高崎町）、原村上下式横穴墓群（高崎町）、横尾地下式横穴墓群（高崎町）。やや南に下り、牧ノ原遺跡群と対峙して志和池古墳群（都城市）、築池地下式横穴墓群（都城市）、平原地下式横穴墓群（都城市）が形成されており、当地域は盆地内における古墳群の集中する一帯となっている。

なお高取原台地東側に位置する鳥井原第2遺跡では、平成12、13年度に調査が実施され縄文時代・弥生時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が出土している。また県指定15号墳脇には町内最古の記年銘である元亀二年（1571）銘をもつ経典供養塔（自然石型・「供養六十六部」「念佛一百万遍」併記）が確認されている。（近沢恒典）

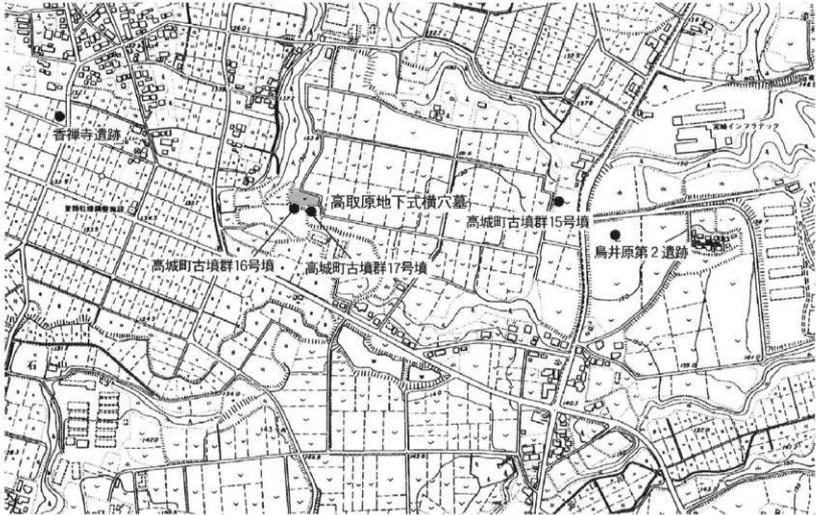


図2 遺跡周辺地形図(1/10,000)



図版1 遺跡遠景(東から)



図版2 調査区全景(東から)

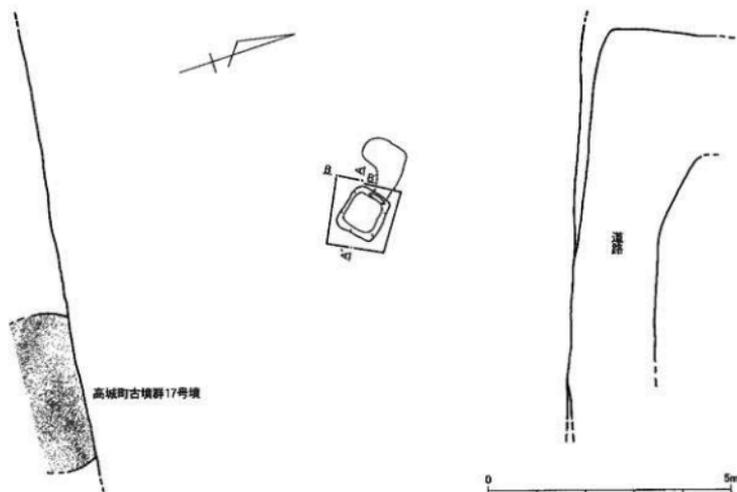


図3 調査区位置図(1/100)

5 層序

土層の観察はトレンチ中央ベルト及びトレンチ西壁において行った。2層に含まれる黒灰色粒は高原スコリアと考えられる。5,6層が地下式横穴墓に伴う堆積である。露島御池軽石をやや多く含む6層はそのまま堅坑へと続く堅坑埋設に係わる最終層である。5層は上下4,7層に比べ多くの露島御池軽石を含む点より、造墓時に露島御池軽石と混合された黒色土が起源であり、堅坑埋設後6層上に被せられた層もしくは6層が流出し形成された層と考えられる。また堅坑が7層より掘り込まれている点より地下式横穴墓築造時の旧表上面が7層であったと想定できるほか、6層が膨らみを持ちながら堆積しており、堅坑埋設が終了した時点において、その上部は旧表土面よりもやや盛り上がるマウンド的な状況であったと考えられた。地下式横穴墓本体は7層の下、厚さ約1mの露島御池軽石層中に構築されており、堅坑の最下部のみが軽石層を抜け、その下の黒色土層にまで達している。(近沢恒典)

- | | | |
|---|------|------------------------|
| 1 | 耕作土 | |
| 2 | 黒褐色土 | 硬くしまりよい。黒灰色粒を少量含む。 |
| 3 | 黒色土 | やややわらかい。露島御池軽石をごく微量含む。 |
| 4 | 黒色土 | やややわらかい。露島御池軽石をごく少量含む。 |
| 5 | 黒色土 | やややわらかい。露島御池軽石を少量含む。 |
| 6 | 黒褐色土 | やわらかい。露島御池軽石をやや多く含む。 |
| 7 | 黒色土 | やややわらかい。露島御池軽石をごく微量含む。 |

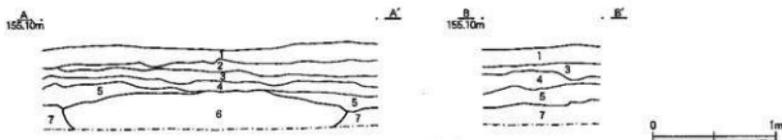


図4 土層図(1/40)

6 出土遺構

1. 竪坑

竪坑の平面形は隅丸方形を呈し、遺構検出面において長軸192cm、短軸165cm、底面においては長軸140cm、短軸123cmを測る。深さは検出面から140cm、旧表土面と考えられる7層上面からは150cmを測る。奥壁、側壁の傾斜角は約80度と急角度であるが壁面からはステップ等は確認されていない。底面の上には硬く踏みしめられた露島御池軽石を多量に含む黒褐色土層(14層)が堆積しており、造墓時、埋葬時の作業面は底面より10cm程高い、この14層上面であったと考えられた。また竪坑埋土は少量の露島御池軽石を含む黒色土層(8~10層)と多量の露島御池軽石を含む黒褐色土層(12~14層)との2層に大きく分けられる。前者は竪坑埋設に直接係る層と考えられ、後者のうち12、13層は閉塞土とはほぼ同じ高さの平坦面を形成しており、閉塞作業にあたって作られた作業面の可能性がある。だが硬く踏みしめられた状態ではないため、ごく短期間の使用であったと考えられる。また竪坑の土層堆積状況からは追葬等がなされた痕跡は見出せなかった。

2. 羨門

羨門は竪坑北壁のやや東寄り、底面より約10cm高い位置に形成される。幅82cm、高さ90cm、底面において最大幅を測り、上部に向けてすぼまる隅丸の三角形に近い形状となる。閉塞施設は羨門内部に黒色土を用いて地上げた上で30~40cm程度の自然石20点を最大5段に平らに積み上げ(第一閉塞)、羨門外側に30~50cm程度の自然石(板石状)12点を縦方向に4段に貼り付けている(第二閉塞)。石材は調査時の目視による確認では全て砂岩であり、加工痕等は確認されなかった。石の隙間には粘土の充填は検出されていないが、第一閉塞と第二閉塞との間には黒色土が埋められていた。

閉塞施設と竪坑土層堆積より埋設過程については次の様に考えられる。埋葬終了後、15層により羨門内部に閉塞石設置用の黒色土層が形成され、第一閉塞が設置される。12、13層により竪坑床面が上げられ平坦面が形成される。だが15層と12、13層、さらに第一閉塞と12、13層との先後関係は明瞭ではない。第一閉塞終了後、その外側に黒色土が充填され、第二閉塞下位1、2段目の板石を設置、11層により固定される。続いて10層により地上げがなされた後、第二閉塞3段目が設置され9層によって固定、地上げが行われる。そして第2閉塞最終4段目が設置され8層により固定された後、6層により竪坑の埋設が完了する。

3. 羨道

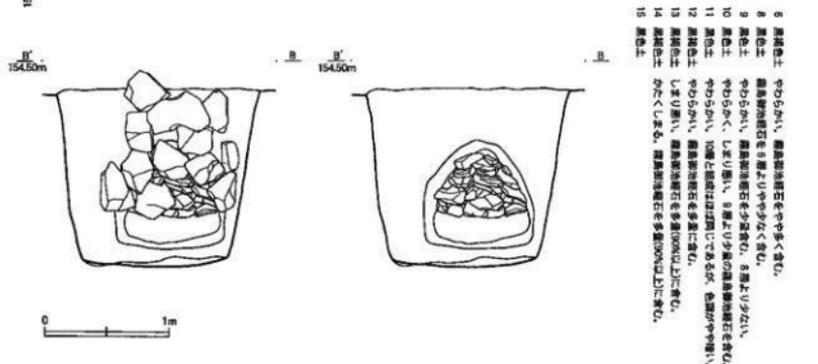
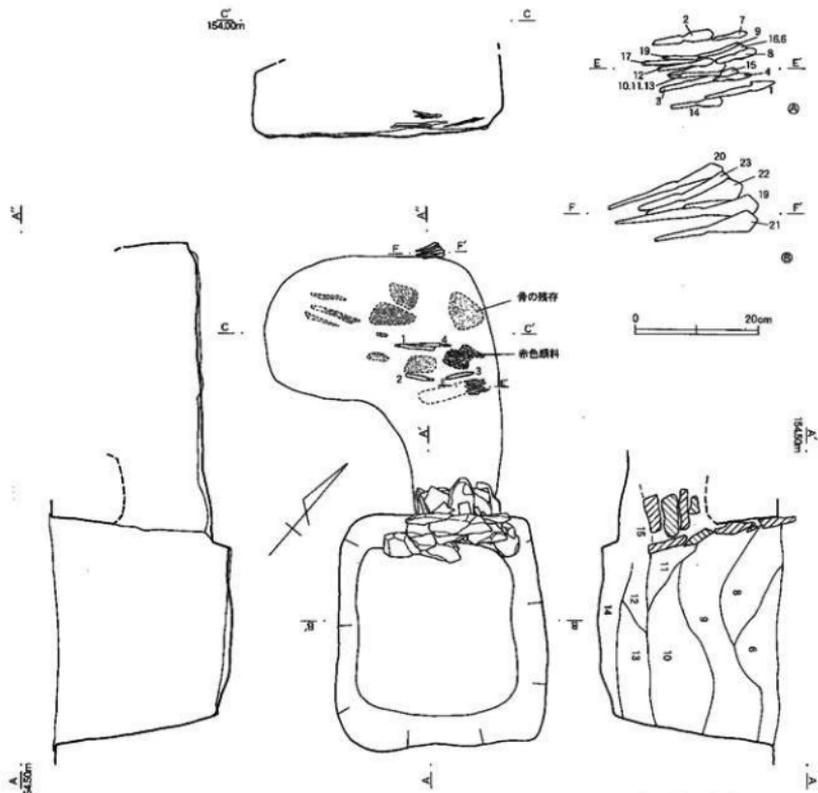
幅65~106cm、長さ119cm、羨門において最小幅を測り、その幅を広げつつ床面も上がりながら玄門に至る。高さは現状では75cmであるが、天井部は脱落しておりその立面形態は不明である。

4. 玄室

発見時、玄室内には土砂が3/4程度堆積した状態であった。図化はならなかったが上位より耕作土、黒色土、天井部を形成していたと考えられるブロック状に硬くしまる露島御池軽石層、ほぐれた同軽石層、玄室床面である比較的しまった同軽石層となる。天井部を構成していた軽石層と床面との間に一層の軽石の堆積が検出されたことは、過去において天井部の軽石が剥がれるように崩落していた結果と見られ、今回の除役時には既に軽石により遺物が覆われた状態であったと考えられた。

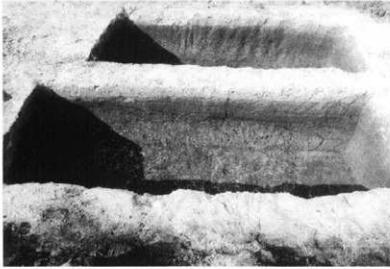
竪坑から玄室へと至る地下式横穴墓の主軸は南東-北西、玄室の長軸は北東-南西である。玄室は平入り片袖、長軸183cm、短軸119cmを測る隅丸方形の平面形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、北東側が若干高くなる。壁面の立ち上がりは床面端よりやや盛り上がりを見せ、そこからほぼ垂直に立ち上がる。天井部は崩落している。また玄室整形に伴う工具痕等は確認できなかった。

玄室内からは鉄線23点、鉄釘4点が出土し、赤色顔料の塗布、人骨の残存と考えられる有機質が検出された。鉄線は出土位置より2グループに分けられる。Aグループは玄門付近において出土した1~18である。片扇状長三角式、変形柳葉式、短頭式、圭頭式からなり、全て切先を北東へ向け、重なり合う状態で出土している。これらの線が床面に接していた部分及び重なり合う最上面にあった線の内面より磨痕の縞み物の付着が確認されている。また検出時には鉄線から東南方向へ約40cmの長さで有機物の残存による変色部が確認されており、位置関係から矢柄または矢柄まで至った落葉の縞み物の痕跡であった可能性がある。Bグループは奥壁付近において出土した19~23である。大型圭頭式一種からなり、全て切先を北東へと向ける。これらは床面より約10cm高くなった露島御池軽石上で検出されたが、軽石を玄室掘削後に盛り上



6 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 7 赤褐色土 骨の残存を中多量に含む。中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 8 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 9 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 10 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 11 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 12 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 13 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 14 赤褐色土 中砂5.9%、黒炭粉0.3%、骨の残存を中多量に含む。
 15 赤褐色土

図5 遺構実測図(1/40・1/8)



図版3 トレンチ中央ベルト土層堆積（西から）



図版4 竪坑土層堆積（西から）



図版5 第二閉塞



図版6 第一閉塞



図版7 玄室（上から）



図版8 鉄鏝Aグループ



図版9 鉄鏝Bグループ



図版10 全景

げたのではなく、奥壁整形時に削り残した部分へと配置した状況であると考えられた。鉄剣は玄門付近、鉄槌Aグループ脇において2、3が切先を東南に向け、直列した状態で出土し、赤色顔料を挟み1、4が切先を東南に向け、重なり合いながら出土している。鉄剣についてはいずれも良好な有機質の残存が確認されたが、出土時に床面に接していた面の方が良好な状態であった。

人骨の遺存状況は悪く、人骨と考えられるペースト状の有機質が確認されたのみであった。その位置関係より玄室の長軸に平行した2体並葬と考えられる。赤色顔料の塗布は玄門に近い人骨でのみ検出された。赤色顔料の位置より北東頭位の埋葬と推測される。(近沢恒典)

7 出土遺物

1. 鉄剣

(1) 概要

高取原地下式横穴墓からは鉄剣が23点出土した。これらは形質的特徴により5型式に分類できる。内訳は、片鬚扶式1点、変形柳葉式2点、短頭式4点、圭頭式11点、大型圭頭式5点である。これらの鉄剣の基部には樹皮とみられる口巻きや竹とみられる矢柄などの有機質が残存するものが多い。

また、大型圭頭式鉄剣を除くほとんどの鉄剣には葉状の編み物が付着している。これは幅約2mmの植物繊維を取って、太さ0.4～0.8mmの糸によって編んだものである。この編み物は鉄剣の両面に付着しており、矢柄部まで達していたとみられる。秋の葉である可能性も否定できないが、捺なども確認されていないので、単に矢を包んだものと考えられよう。ただし、大型圭頭式鉄剣には、この植物繊維が付着せず、副葬時における他の鉄との取り扱いに違いが看取できる。以下、型式ごとに記述を進める。

(2) 片鬚扶長三角式 (図6-1)

1 鐵身部は完形で、鋒から緩やかなふくらを有し、鐵身部は片側を脇扶、もう一方をナゲ関とする。錆化も少なく、残存状態は良好である。矢柄は口巻き下端から3.2cmまで残存する。残存全長は12.2cm、ナゲ関側刃部長3.2cm・頸部長2cm、脇扶側刃部長4.15cm・頸部長2.2cm、基部長4cmを測る。刃部は片鬚造りで、頸部および基部の断面は方形を呈する。茎関はナゲ関である。矢柄の口巻きは樹皮巻によるが、若干錆化している。矢柄部分には植物繊維が付着する。

(3) 変形柳葉式 (図6-2・3)

両丸造りで長い刃部、短い頸部を有し、柳葉式の形態を志向しているが、刃部上半に緩やかな肩をもち、平面形態は圭頭式に近い。すなわち、つくりにおいては柳葉式であるが、平面形態は圭頭式との類似性が指摘できる。

2 鐵身部は完形である。矢柄は口巻き下端から2.7cmまで残存する。錆化も少なく、残存状態は良好である。残存全長は10.7cm、鐵身長5.7cm、刃部長4.3cm、頸部長1.4cm、基部長2.4cmを測る。刃部は両丸造りとし、頸部の断面は長方形、基部の断面も長方形を呈する。明瞭な刃部ナゲ関を有するが、茎関はない。口巻きは樹皮巻で一部は錆により変形するが、巻の単位が確認でき、長さ1.9cmにわたり7～10回巻いたとみられる。刃部から矢柄にかけて、植物繊維が付着する。とくに刃部では残存状態が良好で、幅約2mmの繊維を編み合わせたことが分かる。

3 錆のためか刃部が一方に反っているものの、鐵身部はほぼ原形をとどめている。矢柄は口巻き下端より2.8cmまで残存する。錆化も少なく、残存状態は比較的良好である。残存全長は12.4cm、刃部長4.6cm、頸部長2.5cm、基部長2.9cmを測る。刃部は両丸造りとし、頸部断面・基部断面は長方形を呈する。錆のため不明瞭であるが、刃部から頸部へは緩やかなナゲ関で、茎関はない。矢柄の口巻きは、樹皮巻により上位から下位へ長さ2.5cmにわたり13回ほど巻いたとみられる。口巻き下半には、矢柄の長軸に沿って幅約2mmの植物繊維が付着する。

(4) 短頭式 (図6-4～7)

個体差が大きく多様な一群である。刃部を両鬚造りとするもの(4・5)と、片鬚造りとするもの(6・7)に分けられる。また、片鬚造りの鐵は、刃部が柳葉形(6)と三角形(7)との2者がある。

4 錆化は少なく鐵は完形であるが、矢柄は口巻き以下が欠損し、ほとんど残存していない。残存全長は8.0cm、刃部長2.5cm、頸部長3.0cm、基部長2.5cmを測る。刃部は両鬚造りで、頸部の断面は長方形、基部の断面は方形を呈する。茎関は確認できないが、直角関とみられる。口巻きは不明ながら、その欠損によって鐵の基部に糸巻きがみえ、矢柄に装着する前の状況が確認できる。また、鐵身下部には、幅約2mmの植物繊維が鐵の長軸に沿って付着する。

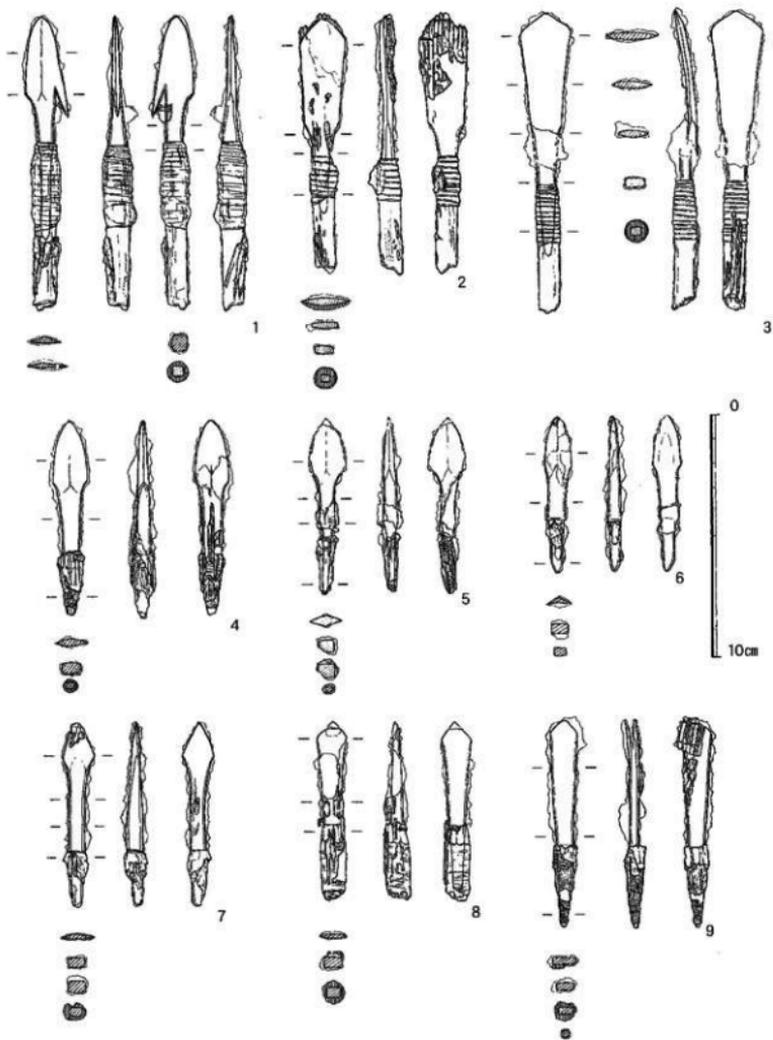


图6 遺物実測図・鉄器1 (1/2)

5 完形に近いが、口巻きを含め矢柄部分はほとんど残存しない。錆化はやや進行しており、刃部と頸部に若干の欠損がある。残存全長は7cm、刃部長1.85(復元長2.1)cm、頸部長1.4cm、莖部長3.75cmを測る。刃部は両端造りで、頸部・莖部の断面は方形を呈する。茎間はナデ関である。矢柄の欠損部では、矢柄挿入前の莖部に糸巻きが施されていることが確認できる。

6 ほぼ完形であるが、矢柄はわずかに付着するのみである。鏽化はやや進行しており、刃部に若干の欠損が認められる。残存全長は6.5cmで、刃部長2.1cm、頸部長2.15cm、莖部長2.25cmを測る。刃部は片端造りで裏スキ状になり、頸部断面は長方形、莖部断面は方形を呈する。茎間は、直角関である。

7 ほぼ完形であるが、矢柄はほとんど残存しない。錆化は進んでおらず、鏽化の状態は良好である。残存全長は7.55cm、刃部長1.35cm、頸部長3.9cm、莖部長2.3cmを測る。刃部は片丸造りで、頸部断面・莖部断面は方形を呈し、茎間は直角関であるとみられる。刃部先端に植物繊維が付着する。

(5) 主頭式(図6・8・9/図7-10~18)

本地下式横穴墓出土鉄剣の中で組成の中心をなす一群である。しかし、同一型式内の形態差が大きく、細分可能である。まず、いわゆる主頭式と呼ばれる一群で、刃部関を有さず、刃部長が短く、刃部幅も狭いもので、刃部から茎にいたるすべての外形ラインが直線的なもの(A類:8~11)、刃部長・刃部幅が若干発達し、刃部関がわずかに確認できる一群で、刃部外形ラインが丸みを帯びるとともに、刃部関から茎にいたるラインが内湾気味にカーブを描くもの(B類:12~18)、に分類できる。さらに、B類が大型化し、刃部関が明瞭に確認できる大型主頭式(19~23)があるが、これは後述するように性格が異なり、以下では独立した別型式として扱う。なお、主頭式では茎関を有するものは確認していない。

a) 主頭式A類

8 錆化が進行しており、鏽化が刃部先端に欠損が認められるが、原形は想定できる。また、矢柄も残存する。残存全長は7.1cm、刃部長0.4(復元長0.7)cm、頸部長3.5cm、莖部長2.65cmを測る。刃部は平造りで、頸部断面は長方形、莖部断面は方形を呈する。口巻きは痕跡しか残存しないが、矢柄の先端部分は、刀子状の工具で細く、多角形に加工していることが確認できる。鏽化下部から矢柄にかけて、幅約2mmの植物繊維が確認できる。

9 錆化が進行しており、とくに刃部は錆によって剥離するが原形は復元できる。残存全長は8.55cm、刃部0.55cm、頸部長4.6cm、莖部長3.4cmを測る。刃部の断面は平造りの可能性が高い。頸部・莖部の断面は長方形を呈する。矢柄の口巻きは、残存が不良ながら、糸巻きであると想定できる。また、矢柄の工具によって細く、多角形に加工されている。さらに、矢柄の欠損によって、莖部の矢柄挿入部分に糸巻きを施したことが確認できる。刃部先端から鏽化下部にかけては植物繊維が付着する。この植物繊維は、幅約2mmのものを幅0.4mmの糸で束ねていることが確認できる。

10 錆化が進行し、莖部は欠損している。矢柄部分も大半は失われている。残存全長は6.0cm、刃部長0.7cm、頸部長2.7cm、現存の莖部長2.5cmを測る。刃部の断面は平造りで、頸部・莖部の断面は長方形を呈する。刃部先端には植物繊維が付着し、幅約2mmの繊維を幅0.4mmの糸で束ねたことが確認できる。

11 鏽化が進行しており、完形である。矢柄は口巻き下端まで残存する。残存全長は8.2cm、刃部長1.2cm、頸部長3.65cm、莖部長3.35cmを測る。刃部は平造りで、頸部・莖部の断面は長方形を呈する。矢柄の口巻きは、比較的明瞭に観察でき樹皮巻により上位から下位へ長さ3cmにわたり11回ほど巻いたとみられる。巻きの半ばにおいて上下の重ねにずれが確認できる。また、欠損部分からは、莖部の矢柄挿入部分に糸巻きを施していたことが確認できる。鏽化下部には植物繊維が付着するが、他のように鏽化長軸に対して平行ではなく直交して付着する。

b) 主頭式B類

12 鏽化が刃部先端に欠損するが、錆化は比較的少なく原形は復元できる。矢柄は口巻き下端2.1cmまで残存する。残存全長は9.0cm、刃部長0.9cm、頸部長3.4cm、莖部長3.7cmを測る。刃部は平造りで、頸部・莖部の断面は長方形を呈する。口巻きの単位は比較的明瞭で樹皮巻により上位から下位へ長さ2.7cmにわたり13回ほど巻いたとみられる。刃部から口巻き部にかけて、幅約2mmの植物繊維が付着している。

13 刃部に錆が認められるが、錆化は進行していない。矢柄は木質が若干確認できるのみで、大半は失われている。残存全長は8.15cm、刃部長1.4cm、頸部長4.4cm、莖部長2.25cmとなっている。刃部は平造りで、頸部・莖部の断面は長方形を呈する。鏽化下部から矢柄の上部にかけて、幅が約1.5mmの植物繊維が付着する。また、矢柄欠損部からは、矢柄挿入前の莖部に糸巻きを施していたことが確認できる。

14 刃部には一部欠損があるが、鏽化は進んでいない。矢柄は口巻き下端より約1cmまで残存す

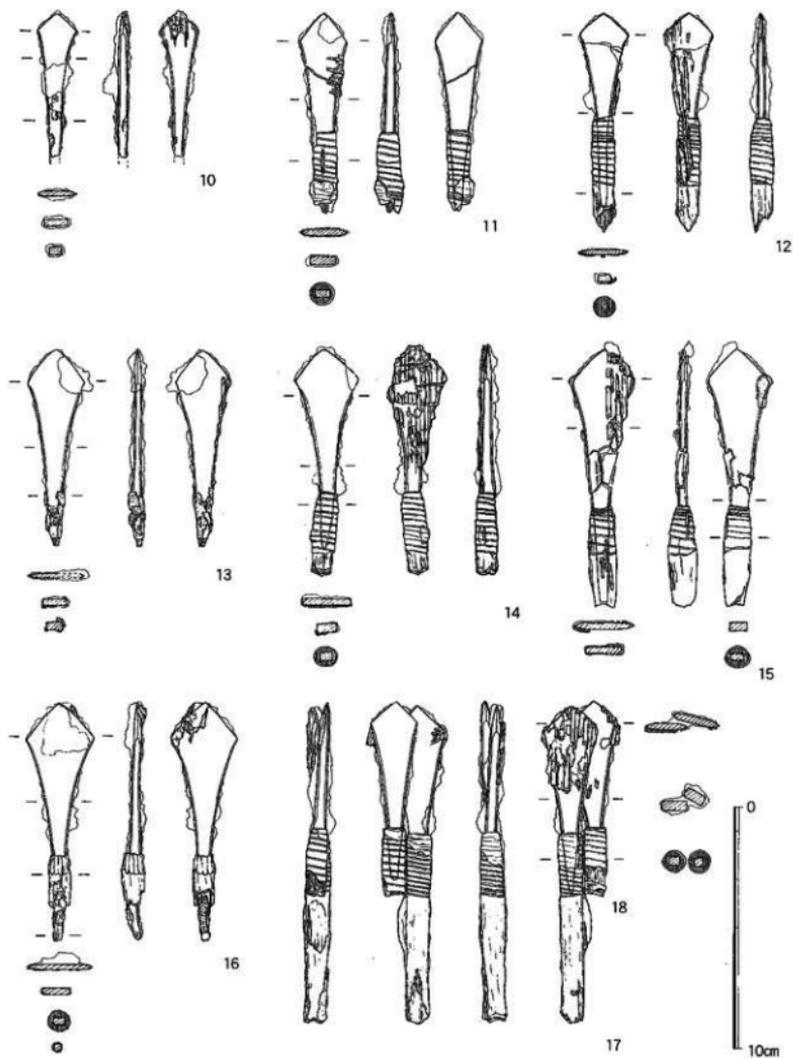


図7 遺物実測図・鉄鏃 (1/2)

る。残存全長は9.3cm、刃部長1.28cm、頸部長4.6cm、茎部長2.3cmを測る。刃部は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きの単位は比較的明瞭で、樹皮巻により上から下へ長さ2.5cmにわたり、0.2~0.3cm単位で10回ほど巻いたとみられる。鐵身部には、幅約2mmの植物纖維が太さ約0.8mmの糸によって束ねられている。

15 鐵身部は原形をとどめるが、鐵身下部には破損があり、全体的に残存状況は不良である。矢柄は口巻き下端から2.2cmまで残存する。残存全長は10.7cm、刃部長1.3cm、頸部長5.2cm、茎部長4.0cmを測る。刃部は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きの単位は比較的明瞭で、樹皮巻により上から下へ長さ2cmにわたり8回ほど巻いたとみられる。鐵身部と矢柄の一部に、太さ0.4mmの糸で束ねた幅約2mmの植物纖維が付着する。

16 鐵身部は錆化が進行せず、完形である。矢柄は大半が失われている。残存全長は9.7cm、刃部長1.45cm、頸部長4.85cm、茎部長3.5cmを測る。刃部は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きは不明であるが、矢柄先端部は遺存し、刀子状の工具によって細く、多角形に加工されていることが確認できる。また、茎部には、矢柄挿入部分に係巻きを施したことが確認できる。刃部の一部には植物纖維が付着する。

17 鐵身部は残存状態がよく、矢柄は口巻き下端より5.25cmまで残存する。残存全長は13cm、刃部長1.0cm、頸部長4.3cm、茎部長2.45cmを測る。刃部は平造りで、頸部の断面は長方形、茎部の断面は方形を呈する。口巻きは一部錆化するが、比較的明瞭で樹皮巻により、上から下へ長さ2.6cmにわたり13回ほど巻いたとみられる。また、口巻きは上端から1.4cmのところまで樹皮の重なりが上下逆になる。これは、他の口巻きにおいては確認できない巻き方である。鐵身部上半片面に太さ約0.6mmの糸によって束ねた幅~3mmの植物纖維が付着する。

18 鐵身部は原形を保ち、矢柄は口巻き部下端まで残存する。残存全長は8.0cm、刃部長0.9cm、頸部長4.35cm、茎部長2.15cmを測る。刃部は平造りで、頸部の断面は長方形、茎部の断面は方形を呈する。口巻きは、一部錆化しているが、比較的明瞭に確認できる。口巻きは、樹皮により上位から下位へ長さ2.7cmにわたり10回ほど巻いたとみられる。刃部の一部に太さ0.6mmの糸によって束ねられた幅約2mmの植物纖維が付着する。

(6) 大型主頭式 (図8-19~23)

他の鐵に比して明らかに大型品である。また、他の群には鐵身部や矢柄に腐み物とみられる植物纖維の付着が確認できたが、このグループの鉄鐵には認められない。出土位置も他の鐵とは離れており、扱いが異なっていたことが理解できる。

この状況から、この鉄鐵は単に主頭式を大型化した鐵ではなく、特殊大型の平根系鐵の一種と理解できる。一方、他の型式の鉄鐵は少数ずつながら小型の細根系鐵であり、鉄鐵の系統・性格が異なるとして理解できる。

19 鐵身部の状態はきわめて良好である。矢柄は口巻き下端8.2cmまで残存する。残存全長は21.7cm、刃部長1.7cm、頸部長6.95cm、茎部長4.45cmを測る。刃部は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きは、樹皮巻によるもので、上から下へ長さ4.1cmにわたり14回ほど巻いたとみられる。この鐵の口巻きは、他の鐵とは異なり矢柄の端部から0.7cm下方より巻き始められている。

20 鐵身部の状態はきわめて良好である。矢柄は口巻き下端より6.8cmまで残存する。残存全長は19.0cm、刃部長1.95cm、頸部長6.65cm、茎部長4.55cmを測る。刃部は平造りで、頸部断面は長方形、茎部断面は方形となっている。口巻きは一部錆化により不明瞭な部分もあるが、樹皮によって基本的には上から下へ長さ3.6cmにわたり15回ほど巻いたとみられる。

21 鐵身部の状態はきわめて良好である。矢柄は口巻き下端より3.6cmまで残存する。残存長は16.7cm、刃部長1.9cm、頸部長7.65cm、茎部長4.25cmを測る。刃部の断面は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きは、樹皮巻によるもので、上位から下位へ長さ3.75cmにわたり21~24回ほど巻いたとみられる。また、口巻きの始点より下に約2.6cmから巻き幅が変わり広くなる。

22 鐵身部の錆化が進行しており、残存状況は不良である。矢柄は口巻き下端より3.9cmまで残存する。残存長15.6cm、刃部長1.6cm、頸部長7.2cm、茎部長3.2cmを測る。刃部は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きは、樹皮巻により上から下へ長さ2.85cmにわたり20回ほど巻いたとみられる。また、巻き幅が約0.1cmと非常に細かい。

23 鐵身部は錆化がやや進行し、刃部先端を破損するが原形は復元できる。残存矢柄は口巻き下端より4.9cmまで残存する。全長16.9cm、刃部長2.35cm、頸部長6.65cm、茎部長5.0cmを測る。刃部は平造りで、頸部・茎部の断面は長方形を呈する。口巻きは、錆化により不明瞭であるが、樹皮巻により、上から下へ長さ3cmにわたって10回ほど巻いたとみられる。巻き幅はおおよそ0.3~0.4cmとやや広い。

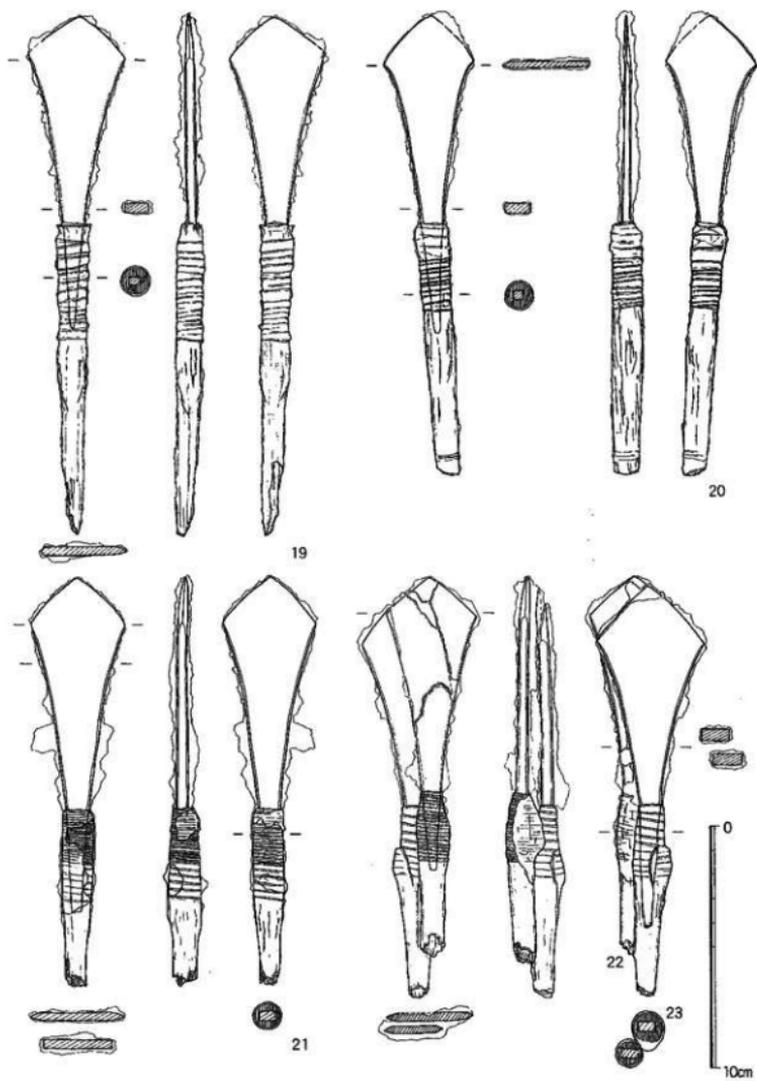
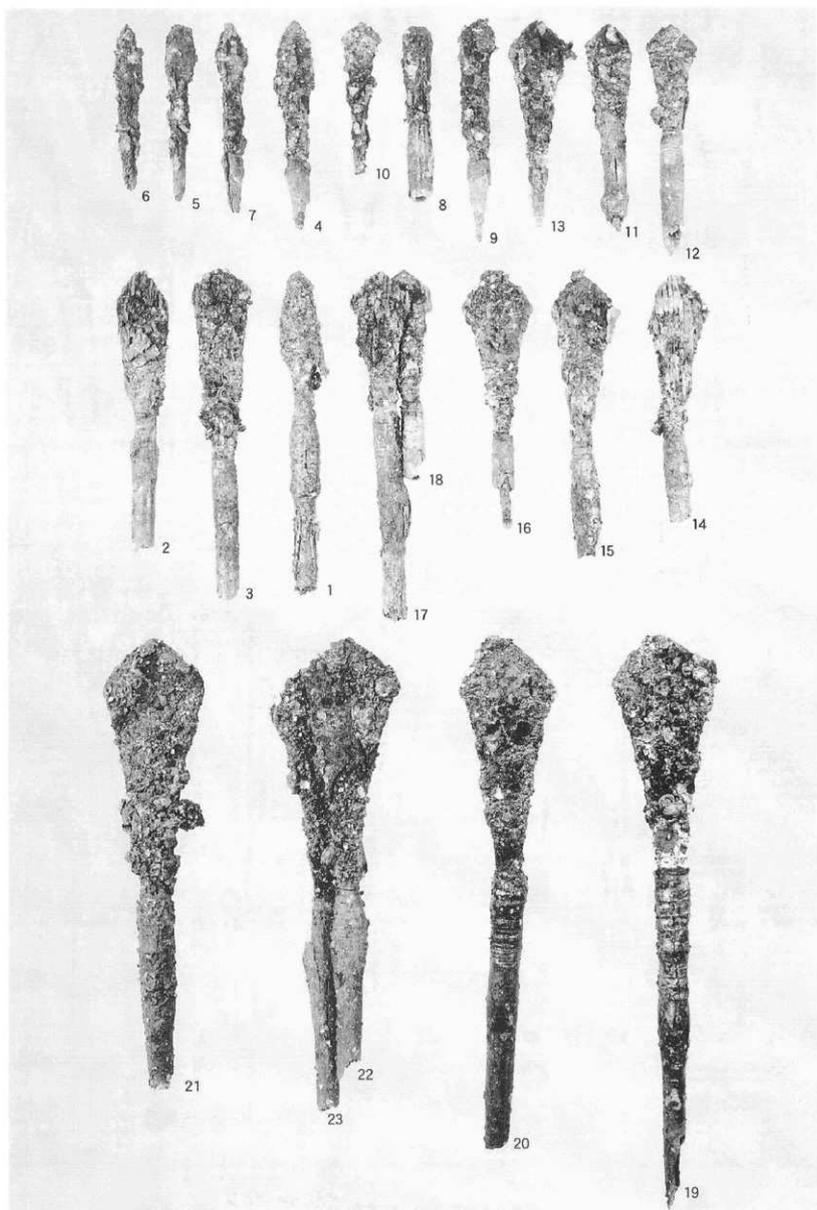


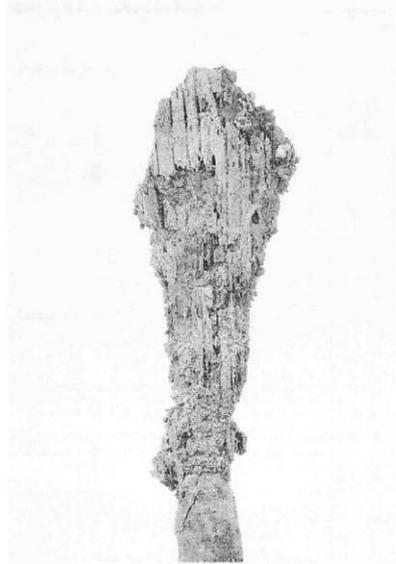
圖8 遺物実測図・鉄鏟3 (1/2)



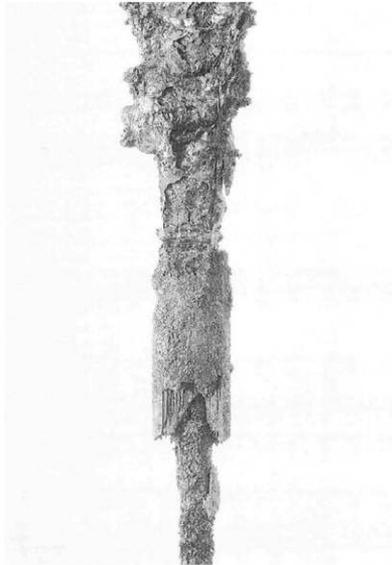
図版11 出土遺物・鉄鏃



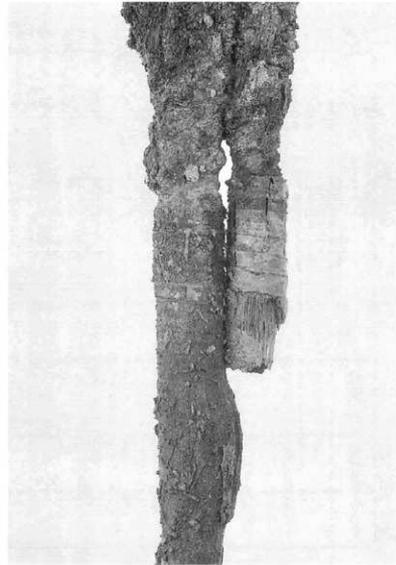
図版12 鉄鏃12・口巻き



図版13 鉄鏃14・付着植物繊維



図版14 鉄鏃16・矢柄先端部加工



図版15 鉄鏃17,18・口巻き

表1 鉄道計測値一覧

(単位: cm)

No.	形式名	頭部長	軀身長	軸身長	軸身部長	万葉			新羅			聖徳			側部	口巻身長	口巻台幅	
						万部長	万葉幅	万葉厚	新羅形	新羅幅	新羅厚	聖徳	聖徳幅	聖徳厚				
1	片巻板式	12.2	9.2	5.2	3.2 (41%)	1.6	0.3	片巻	2.0 (2.2)	0.6	0.4~0.7	方形	4.0	0.4	4.05	方形	3.6	-
2	変形板式	10.7	8.1	5.7	4.3	1.9~1.6	0.3	両丸	1.4	0.7	0.5	変方形	2.4	0.7~0.2	0.3	変方形	1.9	7~10
3	変形板式	12.4	10.1	7.1	4.6	2.1~1.3	0.3	両丸	2.5	1.3~0.75	0.3	変方形	3.0	0.75~0.2	0.32	方形	2.5	1.3
4	短筒式	8.0	8.0	5.5	2.5	1.35	0.35	両輪	3.0	0.8	0.5	方形	2.5	0.3	0.3	方形	-	-
5	短筒式	7.0	7.0	3.25 (3.5)	1.85 (2.1)	1.25 (1.5)	0.45	両輪	1.4	0.65	0.35	方形	3.75	0.3	0.2	方形	-	-
6	短筒式	6.5	6.5	4.25	2.1	1.1	0.28	片巻 (腹久平式)	2.15	1.1~0.8	0.4	変方形	2.25	0.6~0.4	0.4	方形	値角	-
7	短筒式	7.55	7.55	5.25	1.35	1.3	0.2	片丸	3.8	0.6	0.5~0.7	方形	2.3	0.4	0.4	方形	値角	-
8	短筒式A	7.1	6.55	3.9 (4.2)	0.4 (0.7)	1.2	0.2	平直円	3.5	1.2~0.65	0.35~0.6	長方形	2.65	0.65~0.35	0.45	方形	-	-
9	短筒式A	8.55	8.5	5.15	0.55	1.1	-	平直円	4.6	1.1~0.7	0.3	長方形	3.4	0.7~0.2	0.3~0.2	長方形	-	-
10	短筒式A	6.0	5.9	3.4	0.7	1.55	0.2	平直円	2.7	1.6~0.65	0.3	長方形	2.5	0.65~0.4	0.35	長方形	-	-
11	短筒式A	8.2	8.2	4.85	1.2	1.9	0.3	平直円	3.65	1.9~0.8	0.4	変方形	3.35	0.8~0.2	0.35~0.3	長方形	3.0	1.1
12	短筒式B	9.0	8.0	4.3	0.9	1.95	0.2	平直円	3.4	2~0.5	0.3	変方形	3.7	0.5~0.2	0.2	長方形	-	-
13	短筒式B	8.05	8.05	5.8	1.4	2.3	0.2	平直円	4.4	0.7	0.3	変方形	2.25	0.7~0.2	0.3	長方形	-	-
14	短筒式B	9.3	8.18	5.88	1.28	2.15 (2.6)	0.3	平直円	4.6	2.6~0.6	0.4~0.6	変方形	2.3	0.6~0.2	0.4	長方形	2.5	1.0
15	短筒式B	10.7	10.5	4.5	1.3	2.45	0.3	平直円	5.2	2.5~0.7	0.3~0.4	長方形	4.0	0.7~0.3	0.3	長方形	2.0	8
16	短筒式B	9.7	9.7	6.3	1.46	2.7	0.25	平直円	4.85	2.7~0.5	0.3~0.5	長方形	3.5	0.5~0.3	0.3	長方形	-	-
17	短筒式B	13	7.65	5.2	1.0	2.15	0.25	平直円	4.2	2.2~0.7	0.4	長方形	2.45	0.7~0.2	0.4	方形	2.6	1.3
18	短筒式B	8.0	7.4	5.25	0.9	1.85	0.3	平直円	4.35	1.9~0.6	0.4	長方形	2.15	0.6~0.2	0.4	方形	2.7	1.1?
19	大筒半筒式	21.5	13.1	8.65	1.7	3.9	0.4	平直円	6.95	4.0~0.9	0.35	長方形	4.45	0.9~0.1	0.35	長方形	4.1	1.4
20	大筒半筒式	18.9	13.15	8.6	1.95	3.65	0.3	平直円	6.65	3.7~0.9	0.25~0.4	長方形	4.55	0.4~0.2	0.4	方形	3.6	約1.5
21	大筒半筒式	16.7	13.8	9.55	1.9	3.8	0.35	平直円	7.65	3.9~0.95	0.4	長方形	4.25	0.95~0.35	0.4	長方形	3.75	2.1~2.4
22	大筒半筒式	15.6	12	8.8	1.6	3.5 (3.68)	0.3	平直円	7.2	3.5~0.8	0.4~0.55	長方形	3.2	0.8~0.25	0.4	長方形	2.85	約2.0
23	大筒半筒式	16.8	14.0	9.0	2.35	4.35	0.3	平直円	6.65	4.4~0.9	0.4~0.5	長方形	5.0	0.9~0.3	0.4	長方形	3.0	1.0

2. 鉄剣 (図9-1～4)

1 全長24.2cm、刃部長19.7cm、茎部長4.5cm、関付近での身幅は2.5cm、刃部断面厚0.4～0.5cm、茎部断面厚0.4cmを測る。剣身は両丸造りである。関の形状はナデ関で、把縁は関部から約3mm上方に位置するとみられる。茎は関部から徐々に幅を減じて茎尻にいたる。茎尻は一直線の一文字尻とみられる。把には合わせ目が確認できないことから、茎は落とし込みで、1ヶ所の目釘と撾り糸による巻き上げによって固定されている。撾り糸は太さ約0.4mm、撾り幅が約1mmである。また、把の糸巻き部は、把縁から2.8cm下方に位置し、両脇に刺り込み加工が施されている。糸巻きが行われている部分の断面は楕円形を呈し、長径が約2cm、短径が1cmである。把頭の形態は欠損のため不明である。

鞘は木製の2枚合わせで、表面に布が巻かれている。重なりからこの布は、鞘尻から鞘口へと巻かれていたことがうかがえる。またこの布は、糸の太さ約0.2mmで、編み幅は経糸が約0.2mm、緯糸が約0.8mmである。鞘口と把縁の間には2mmほどの空白部が存在する。

2 全長27.0cm、刃部長20.5cm、茎部長6.5cm、関付近での身幅は2.7cm、刃部断面厚0.4～0.5cm、茎部断面厚0.4cmを測る。剣身は両丸造りである。関の形状はナデ関で、把縁は関の位置とほぼ一致する。茎は関部から徐々に幅を減じて茎尻にいたる。茎尻は丸く加工された栗尻である。把は錆化が著しく、木質の状況を知ることは困難であるが、目釘孔は1ヶ所確認でき、目釘自体も残存する。

鞘は木製の2枚合わせで、表面には樹皮を巻き、さらにその上から布を巻いている。重なりから、樹皮・布ともに鞘尻から鞘口へと巻いたと考えられる。樹皮の巻き幅は3～4mmである。また、布は糸の太さ約0.2mm、編み幅は経糸が約0.2mm、緯糸が幅約0.4mmである。鞘口と把縁の間には1cmほどの空白部が存在する。

3 全長21.3cm、刃部長16.8cm、茎部長4.5cm、関付近での身幅2.6cm、刃部断面厚0.5～0.6cm、茎部断面厚0.4cmを測る。剣身は両丸造りである。関の形状はナデ関で、把縁は関の位置とほぼ一致する。茎は関部から徐々に幅を減じて茎尻にいたる。茎尻は一直線の一文字尻である。把は遺存状態が悪く、木質がわずかに確認できるのみであるが、1ヶ所の目釘痕跡を確認できる。

鞘は木製の2枚合わせで、劣化が進み、表面への付加物の有無は確認できない。鞘口と把縁の間には4mmほどの空白部が存在する。

4 全長41.8cm、刃部長32.4cm、茎部長9.4cm、関付近での身幅2.75cm、刃部断面厚0.4～0.5cm、茎部断面厚は0.5cmを測る。剣身は両丸造りである。関の形状は直角関で、把縁は関よりわずかに剣側面に及ぶ。茎は関部から幅を減じて茎尻にいたる。茎尻は隅丸で、若干丸みを帯びる。把は錆化・劣化が進行しているが、わずかに残存する木質の側面に合わせ目が確認できないことから、落とし込みでつくられ、把木は1カ所の目釘と糸巻きによって固定にれたと思われる。巻き上げ糸の幅は約1mmである。把部には、把木の上から巻いた糸とは別に、茎に直接巻きつけた撾り糸を確認することができる。これは把木に穿たれた落とし込み孔と茎との差を調整する役割があったと思われる。この糸は太さ約1.2mm、撾り幅が約0.4mmである。

鞘の残存状況は良好でないが、木製の2枚合わせとみられる。劣化のため、表面の付加物は認められない。鞘口と把縁の間には1.2cmほどの空白部が存在する。

(藤井大祐・橋本達也)

表2 鉄剣計測値一覧

(単位: cm)

No.	全長	刃部				把縁部					備考		
		刃部長	造り	刃部断面	鞘の技法	茎長	茎部断面	関の形態	茎尻	目釘数		把の技法	把頭部断面
1	24.2	19.7	両丸	0.4～0.5	2枚合わせ	4.5	0.4	ナデ関	一文字尻	1	落とし込み	楕円形	鞘に布巻き・把木に糸巻き
2	27.0	20.5	両丸	0.4～0.5	2枚合わせ	6.5	0.4	ナデ関	栗尻	1	?	?	鞘に樹皮・布巻き
3	21.3	16.8	両丸	0.5～0.6	2枚合わせ	4.5	0.4	ナデ関	一文字尻	1	?	?	
4	41.8	32.4	両丸	0.4～0.5	2枚合わせ	9.4	0.5	直角関	隅丸	1	落とし込み	?	茎に撾り糸巻き・把木に糸巻き

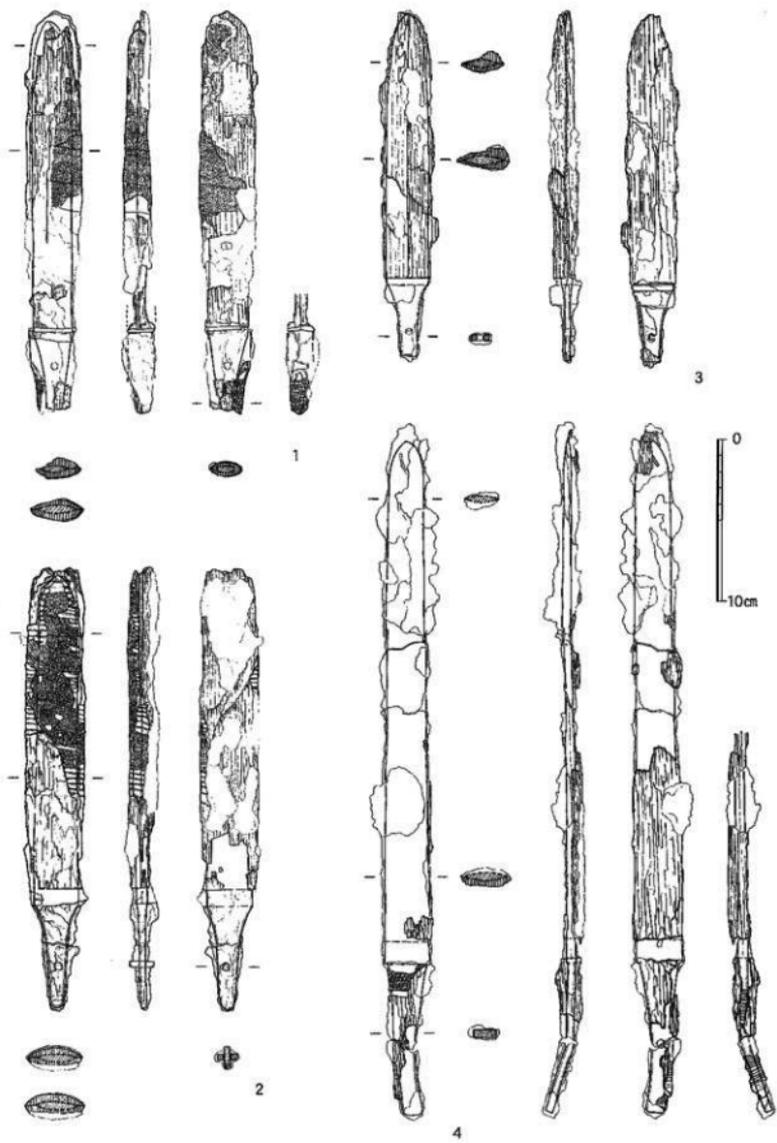
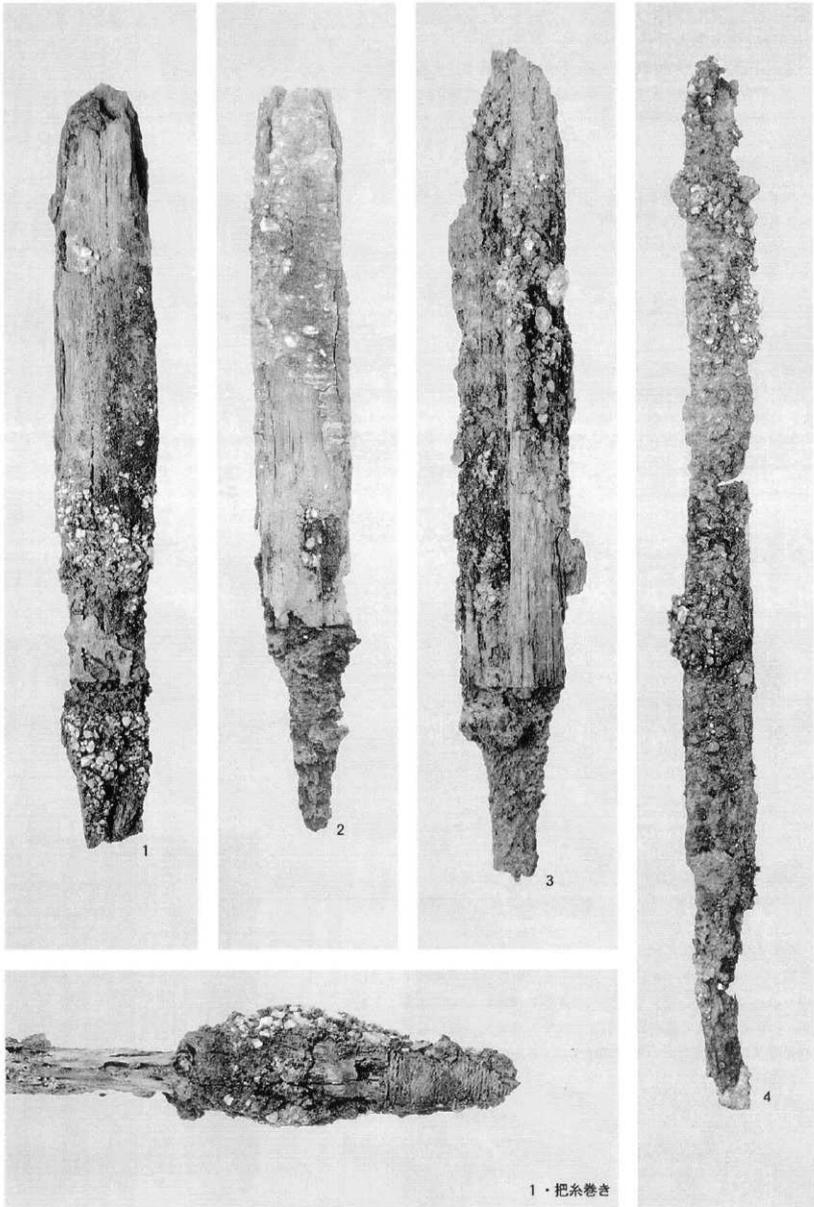


图9 遗物实测图·铁剑 (1/3)



図版16 出土遺物・鉄剣

8 自然科学分析

1. 分析資料および分析内容

- ① 鉄剣1…鞘木の樹種の同定・布の織り組織と繊維種同定
- ② 鉄剣2…鞘木の樹種の同定・布の織り組織と繊維種同定
- ③ 鉄剣4…鞘木の樹種同定

2. 使用機器

- ・走査型電子顕微鏡（以下、SEM）（朝日立製作所S-3500N）
- ・実体顕微鏡（Leica社 MZ16）

3. 方法

3-1 樹種同定

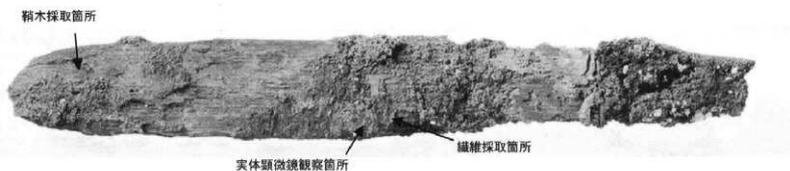
ごく微量の用材をメスで採取し試料とした。広葉樹の場合は同定に必要な木口面と板目面をカミソリの刃を用いて表出させSEMで観察し、道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を調べ、同定を行った。針葉樹の場合は、必要に応じて同定に必要な木工面や柃目面をカミソリの刃を用いて表出させSEMで観察し、早材から晩材への移行、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等を調べ、同定を行った。

3-2 織り密度測定と繊維種同定

付着した布を実体顕微鏡で観察し写真撮影を行った。写真を基に経緯糸の1cm当たりの本数を計測し織り密度とした。布の耳が見えないため本数の多い方を経糸として計測した。また、ごく微量の繊維を採取し、SEMで断面観察を行い繊維の種類を同定した

4. 結果

① 鉄剣-1



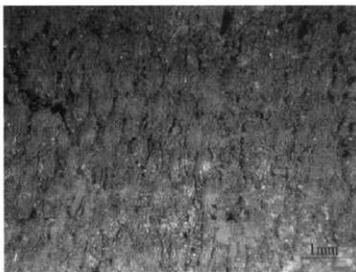
図版17 鉄剣1の分析箇所

樹種:軸方向の構成要素は側壁に有縁孔があり針葉樹である。また、仮道管壁に2本が対になったラセン肥厚がみられる(図版18)。以上よりカヤと同定した。

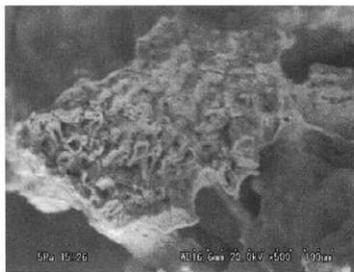
付着布:付着布を実体顕微鏡で観察した結果、布は平織で織り密度は経34~38本×緯18本(1cm)であった。(図版19)。見かけ上、糸の撚りは見られなかった。ごく微量の繊維を採取しSEMで観察した結果、形状はNo.1-1の鉄剣ほど明瞭ではないが繊維の抜け殻断面は丸みを帯びた三角形であった(図版20)。以上より、布の繊維は絹と考えられる。



図版18 鉄剣1・鞘木の木材組織



図版19 鉄剣1・附着布の実体顕微鏡画像

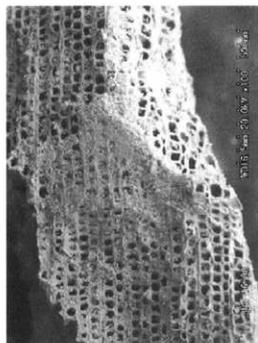


図版20 鉄剣1・繊維断面のSEM画像

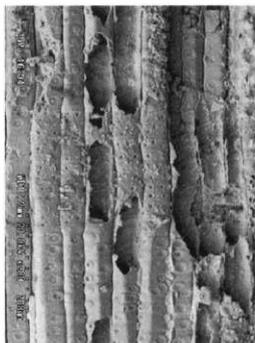
② 鉄剣-2



図版21 鉄剣2の分析箇所



a 木口面



b 柱目面1

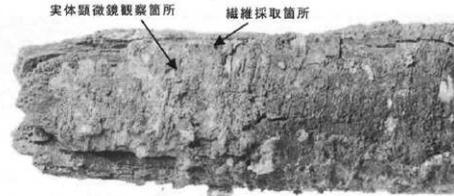


c 柱目面2

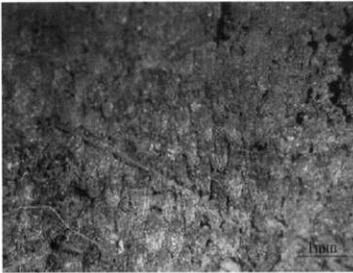
図版22 鉄剣2・鞘木の木材組織

樹種：木口面で、早材から晩材への移行が緩やかである。(図版22, a)。柱目面で仮導管の放射壁に有縁壁孔が見られる(図版22, b)以上よりヒノキと同定した。

附着布：附着布を実体顕微鏡で観察した結果、布は平織で織り密度は経33～35本×緯13～15本(1cm)であった。見かけ上、糸の撚りは見られなかった。ごく微量の繊維を採取しSEMで観察した結果、繊維は、存在しないが繊維の抜け殻断面は丸みを帯びた三角形で、2本が対になった部分が多く見られた(図版25)。以上より、布の繊維は弱で、精練していない生糸を用いた可能性が高い。



図版23 鉄剣2・附着布の分析箇所



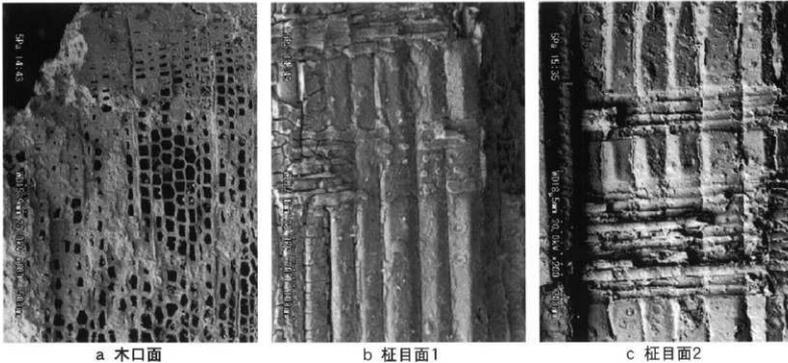
図版24 鉄剣2・附着布の実体顕微鏡画像



図版25 鉄剣2・繊維断面のSEM画像

③ 鉄剣-4

樹種：木口面で、速材から晩材への移行はやや急である(図版26, b, c)。放射組織の分野壁孔はサビで塞がれ形状を確認できないが比較的小型でヒノキ型に近く、1分野に2個見られる。以上よりスギの可能性もあるがヒノキの可能性が高い。



図版26 鉄剣4・鞘木の木材組織

(元興寺文化財研究所 井上美知子)

9 まとめ

高取原地下式横穴墓は都城盆地北部に位置し、大淀川河岸を望む標高約150mのシラス台地上に立地する。周囲5km程度の範囲には古墳群・地下式横穴墓群が散在し、盆地内における集中域となっている。

今回の調査は耕作中の陥没に起因し、1基のみの調査であった。その形態は平面形が隅丸方形を呈する竪坑、石を使用した羨門閉塞、隅丸方形で平入り右片袖タイプの玄室からなる。玄室の立面形は崩落により詳細は不明であった。また閉塞施設は羨道入口に積まれた第一閉塞と、羨門外部に貼り付けられた第二閉塞からなり、閉塞施設と竪坑土層堆積の観察から7段階以上に渡る埋設工程が想定された。遺物は玄室内より鉄鍔23点、鉄剣4点が出し、人骨の残存と考えられるベスト状の有機質、赤色顔料の塗布が検出された。遺物については有機質の残りも良好であり、橋本達也・藤井大祐両氏より詳細な分析を頂いた。その一例としては鉄鍔の一部に付着した植物繊維を束ねた編み物の存在が挙げられ、鉄鍔を巻き包み剛性を付与した状態と認識された。類例としては麻布を使用したびの市島内32号地下式横穴墓出土鉄鍔がある。また鉄剣1、2の鞘には木質部の上に樹皮や布製品を巻いている状況が確認され、自然科学分析より鉄剣1の木材はカヤ、布製品は平絹、鉄剣2の木材はヒノキ、布製品は平絹との結果が得られている。遺物の性格・位置付けに関しては「小考-高取原地下式横穴墓出土鉄鍔の意義」にて詳しい考察を頂いた。広域流通する鉄鍔と在地生産された鉄鍔とが混在する組成が指摘され、年代的には古墳時代中期前半にあたりとされる。また遺物等の出土位置より2体並葬と想定され、玄門側被葬者には鉄剣及び広域流通する鉄鍔と在地生産の鉄鍔(18点)、奥壁側被葬者には在地生産の鉄鍔(5点)が帰属すると考えられた。帰属する遺物の質・量の差に加え、玄門側被葬者には赤色顔料が塗布されており、被葬者間の埋葬状況に明瞭な差がうかがえた。

当地地下式横穴墓にて最も目を引く構造に2重の石閉塞がある。羨門石閉塞は宮崎県域では一般的な存在であり、年代的にも幅広い。構造的には羨道入口に水平に積み上げるタイプ(I型)、羨門に立て掛け・貼り付けるタイプ(II型)に大別されると考えられる。分布状況では後者が卓越するえびの盆地と、前者が主体となるその他の地域との間に差異が見られる。今回検出された混合タイプ(III型)も少数ではあるが確認され、水平方向に積み上げた外面に立て掛け・貼り付けるタイプ(III-1型)と水平方向に積み上げた上に立て掛けるタイプ(III-2型)に細分できる可能性が考えられた¹⁾。閉塞施設と玄室平面形とを組み合わせた場合、当地地下式横穴墓と同様の「平入り片袖タイプ-閉塞III-1型」の類例としては高崎町原村上2号地下式横穴墓、高取町立切15・60号地下式横穴墓、高取町白守1・3・7号地下式横穴墓、高取町旭台12号地下式横穴墓、小林市下の平2号地下式横穴墓が挙げられ、分布は西諸県地域に偏る。このうち原村上2号地下式横穴墓、日守3号地下式横穴墓、立切60号地下式横穴墓は出土鉄鍔からみて当地地下式横穴墓と同時期の第2段階に属するとされる²⁾。また西諸県地域では左片袖タイプの玄室は相対的に古い段階に位置すると指摘されており³⁾、上記の組み合わせは古墳時代中期前半の西諸県地域における特徴の一つとして捉えることも可能かと考えられた。だが閉塞施設に関しては石材供給や追葬の問題等もあり、現状では可能性の提示に留まらざるを得ない。

高取原地下式横穴墓の位置付けとしては年代的には古墳時代中期前半にあたり、都城盆地における現状での最古例とされる。そしてその形態や鉄鍔組成には西諸県地域との共通性がうかがわれ、えびの盆地に端を発した地下式横穴墓が、西諸県地域を経由し都城盆地へと伝播した際の初期的な様相を示すものと考えられた。

最後になりましたが、調査・整理・報告書作成にあたり多くの諸氏、諸機関より御指導、御支援を頂きました。特に調査時には矢部喜多夫氏、整理・報告書作成に関しては橋本達也氏より多大な御協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

(近沢恒典)

- (1) 文献3を基礎資料に集計を行った。総計187基、I型51基、II型40基、III-1型18基、III-2型8基。詳細不明が70基となる。
- (2) 本文24頁「小考-高取原地下式横穴墓出土鉄鍔の意義」による。
- (3) 文献1によると西諸県地域では左片袖→左・右片袖→両袖への変遷が指摘され、両袖が主流となるのは長頸類登壇以降とされる。

【参考文献】

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 和田啓啓2001「日向の地下式横穴」 | 5 宮崎県教育委員会1981「宮崎県文化財調査報告書 第23集」 |
| 「九州の横穴墓と地下式横穴墓」九州前方後円墳研究会 | 6 高崎町教育委員会1988「原村上地下式横穴墓群」 |
| 2 橋本達也2003「副葬鉄器からみる古墳時代の南九州」 | 7 高取町教育委員会1991「立切地下式横穴墓群」 |
| 九州前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性 | 8 えびの市教育委員会2001「島内地下式横穴墓群」 |
| 九州前方後円墳研究会 | 9 西都市教育委員会2003「堂ヶ島第2遺跡」 |
| 3 九州前方後円墳研究会2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」 | 10 豊城市教育委員会2004「築地遺跡(第1~4次発掘調査)」 |
| 4 宮崎県教育委員会1980「宮崎県文化財調査報告書 第22集」 | 11 宮崎県1993「宮崎県史 資料編 考古2」 |

10 小考—高取原地下式横穴墓出土鉄鏡の意義—

一般的に地下式横穴墓において、もっとも主要な出土遺物は副葬鉄器であり、なかでも、もっとも広く認められるのが鉄鏡である。また古墳時代の鉄鏡は近年とくに全国的な編年や地域性に関する研究がより深化しつつあり、その時間的・空間的位置づけが比較的容易な資料である。これらのことから、ここではこの副葬鉄鏡によって高取原地下式横穴墓の位置づけについて若干の考察を試みる。

(1) 鉄鏡の年代的な位置づけ

高取原地下式横穴墓から出土した鉄鏡の年代線を考えるうえで重要な位置を占めるものに、まずは短頸式鉄鏡（以下では短頸鏡と表記、他の型式も同様）があげられる¹¹⁾。刃部を円錐ないし片錐とし、刃部ナデ間とするこの鉄鏡は古墳時代中期前半に特徴的な型式である（図11-1～9）。その初現例は中期初頭の大阪府和泉黄金塚古墳東棟・西棟などから出現するが、中期前半でも比較的中葉に近い時期に類例が多く、中期中葉のTK73型式段階、遅くともTK216型式段階には姿を消す。この鏡の存在から、まずは中期前半という年代に絞り込むことができる。なおかつ、この型式内でも鏡身幅が広く、頸部も短い高取原例の特徴は最新相には含まれずTK73型式段階以前の様相として良いであろう。

次に、片錐鉄鏡はきわめて類例の限られた資料である。高取原例と同型の片錐狭長三角短頸鏡は東京都野毛大塚古墳第3主体部に存在している（図10-12・13）。この両者の片錐鉄鏡では、高取原例の方がわずかに刃部が開延び気味で、野毛大塚第3主体例の方がやや短く、厚く古拙の感はある。しかし、大きな差は見いだしがたく、同段階に位置づけて良いであろう。野毛大塚古墳第3主体部は中期前半ではやや後出的な新しい段階に属するものである。

また、本文で主頭式A類とした細身で鏡身が小型の主頭鏡は三重県石山古墳東棟—中央標間、大阪府唐塚古墳（図10-21）、岡山県金蔵山古墳（図10-22-23）などでみることができる。小型主頭鏡の副葬は奈良県富雄丸山古墳（図10-16-17）や京都府園部垣内古墳（図10-18-19）などの古墳時代前期末以降、中期初頭を中心としてみられ、中期前半でも初期段階に位置づけられる。

これらの、鉄鏡組成から検討すると、高取原地下式横穴墓には、若干の新古の様相を併せもつが、全体としては中期前半のなかでは新段階に位置づけられよう。須恵器型式のTG232型式併行段階とみられよう。

(2) 鉄鏡の組成

高取原地下式横穴墓出土の鉄鏡の組成は片錐鉄鏡1本、定形柳葉鏡2本、短頸鏡4本、主頭鏡16本、大型主頭鏡5本であり、その中心は主頭鏡である。これに類する組成には、北諸県郡高崎町原村上2号・小林市新田場7号・西諸県郡高原町日守3号・同町旭台7・9号地下式横穴墓などをはじめとして、西諸県地域を中心に類例が多くみられる¹²⁾。

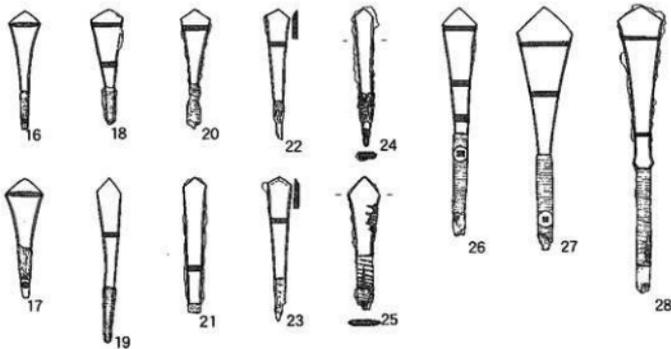
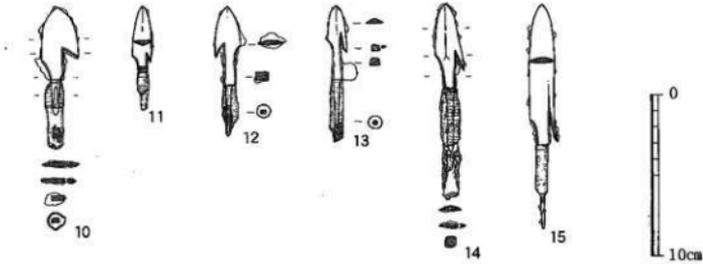
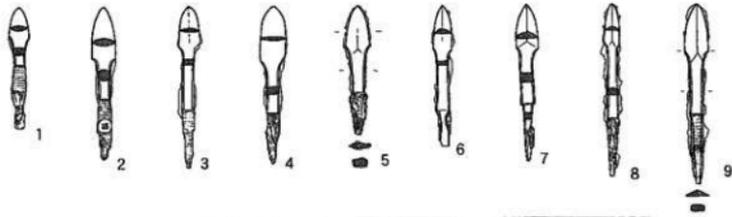
これらとはくに、主頭鏡を中心としながらも、1～2本ずつ数種類の鏡を組成の中にも組み込んでいる。そして、その少数派の鏡は、二段逆刺鏡や柳葉鏡、そして短頸鏡といった型式からなっている。これらは日本列島の広域において、しばしば古墳副葬鏡組成の中心的な存在となり、数十本単位の束で同種多量副葬されるものである。

短頸鏡の副葬から、古墳時代中期前葉の南九州の古墳時代人が広域流通する鉄鏡を入手できたこと、同時代の先進的な武器に関する情報を知り得たことが明らかである。しかし、一方でその少量副葬という組成はこの種の鏡が南九州では地域社会の中で独自の意味が付与されていたことをうかがわせる。

南九州地域あるいは地下式横穴墓の副葬鏡の特徴としては、従来、独自の発展をみせる主頭鏡や二段逆刺鏡の集中的な分布などに目を奪われがちであった。しかし、他地域とは異なる組成自体が地域的な様相であるという観点にも注目する必要がある。古墳時代中期は全国的に鏡型式や組成の共通化を特徴とするが、南九州では特徴的な主頭鏡の生産とともに、その組成の構成法にも独自の地域的背景をもった扱われ方がなされているのである。

(3) 鉄鏡各論

片錐狭長柳葉式鉄鏡（図10-10～15） きわめて類例の少ない型式の鉄鏡である。わずかに、古墳時代前期には滋賀県雪野山古墳に、古墳時代中期前半には野毛大塚古墳第3主体部と茨城県北椎尾天神塚古墳に出土例がある。その他は鹿児島県湧水町北方3号墳に中期中葉に位置づけられる鏡身が長大化した片錐狭長柳葉鏡があるのみであろう。雪野山古墳は古墳時代前期前半、野毛大塚古墳、北椎尾天神塚古墳は中期前半を代表する有力首長墳である。これらの古墳はその構造や副葬品内容などからいづれも近畿中央政權との強い結びつきをもつと考えられ、この種の鉄鏡が偶発的に地方生産されたとはみられないことを物語る。この鏡は中央政權下で製作・配布されたものとみるのが妥当であろう。高取原では1点



1. 大阪府和泉黄金塚古墳東梯 2. 大阪府和泉黄金塚古墳西梯 3・4. 大阪府盾塚古墳 5. 宮崎県高取原地下式横穴墓 6. 大分県碑古墳 7. 京都府宇治二子山北墳西梯 8. 福岡県永瀬4号墳 9. 静岡県千人塚古墳 10. 滋賀県雪野山古墳 11. 茨城県北椎尾天神塚古墳 12・13. 東京都野毛大塚古墳第3主体 14. 宮崎県高取原地下式横穴墓 15. 鹿児島県北方3号墳 16・17. 奈良県富雄丸山古墳 18・19. 京都府園部埴内古墳 20. 京都府瓦谷1号墳 21. 大阪府盾塚古墳 22・23. 岡山県金藏山古墳 24・25. 宮崎県高取原地下式横穴墓 26・27. 福井県天神山7号墳 28. 静岡県五ヶ山B2号墳

図10 高取原地下式横穴墓に関連する鉄鏃の諸例

のみの出土であるが、この地下式横穴墓の被葬者が近畿中央政権を中心と有力首長者層からなる広域交流のネットワークに連なっていたことを明確にするものである。

変形柳葉式鉄鏃 つくりは柳葉鏃であるが、平面形態に圭頭鏃の影響がみられる類例のない特異な型式の鏃である。

南九州地域の圭頭鏃は地域内で独自に変遷する顕著な地域色をもち、在地内において生産されていたと考えられる。すなわち、この変形柳葉鏃が生み出される背景には、当該地域の鉄器製作の場において情報としての柳葉鏃は認識し、その製作を志向したものの、工人のもつ製品の範囲・製作技術に規制され、厚みを変えながら、緩やかなS字ラインを描く形態には、つくり得なかったものと考えることができよう。

現状では南九州において圭頭鏃以外にも、異形鉄器など在地製鉄器があることからすれば、古墳時代中期前半までに鉄器生産自体は一定の普及があったと考えられる。しかし、少なくとも柳葉鏃に関しては、その製作に取り組みはしたものの、範囲を踏襲し、形にするには至らなかったことを本例は示している。

南九州では鉄板を切り、研ぐという単純な技術が主体を占め、複雑な形態を生み出す鍛打や切り込みなどの細工を必要とする圭頭鏃以外の鉄器の生産は基本的に行わなかったのではなかろうか。南九州の古墳時代中期前半の在地生産鉄器の製作技術を考える上でも重要な資料である。

大型圭頭式鉄鏃 他の鉄鏃は細身で小型であることを特徴とする細根系であるが、この型式のみは大型で平根系に位置づけられる。大きさに加え、副葬時の扱いも異なり、他の一群の鉄鏃とは区別される。小型の圭頭鏃と大型圭頭鏃とは系譜が異なるものであり、製作段階や年代差を示すものではないことを示している点において高取原は重要である。今後のより詳細な編年研究を進める際に重要な手がかりを与えるものであろう。

大型圭頭鏃は古墳時代中期の南九州において顕著に分布し、独自の形態的な変遷が認められ、かつ、その中心が宮崎県西諸県地域であることも動かない(和田2001・2002)。すなわち、西諸県地域に中心的な生産地があり、その周辺を含む範囲を中心として流通した在地製品と考えられる。

一般に古墳時代中期は武器が政治的・社会的な結びつきを表す役割をもっており、鉄鏃形態においても全国的な共通性が高く、地域の様相はほとんど見ることができないことを特色とする。しかし、南九州の圭頭鏃のみは独自性の顕著な型式として存続し、この地域が鉄器製作に関する技術・情報を一般的な古墳時代社会との間に共有しなかったことを明確に示している。

(4) 地下式横穴墓の出現と高取原地下式横穴墓

a. 段階区分

次に、鉄鏃の位置づけを軸として高取原地下式横穴墓の墓制としての評価を加えておきたい。まずは古墳時代中期の地下式横穴墓出土鉄鏃を概観しておく。

地下式横穴墓出土の鉄鏃は共伴関係から大きく以下の段階に区分できる。ここでは併行関係の捉えやすい広域流通の鉄鏃を軸に掘え大枠を示すににとどめるが、地下式横穴墓では、その主体を占める在地的な圭頭鏃の型式学的研究により、さらに細分を進める必要がある。

第1段階＝短頭鏃出現以前の小型鉄群を中心とする段階。古墳時代前期末～中期初頭に位置づけられる。

第2段階＝短頭鏃・扇状柳葉鏃・二段逆刺鏃など中期前半の鉄鏃を共伴する段階。

第3段階＝長頭鏃を共伴する段階。

以下に古墳時代中期の各段階について若干説明を加えておこう。

b. 第1段階

鉄鏃 地下式横穴墓の出現段階の資料である。鏃身長が短く、長さと鏃身幅が近似値をとる五角形状の小型圭頭鏃を中心として、やはり鏃身長が短く、側縁がS字カーブを呈さない小型柳葉鏃などから構成される副葬鉄群である。これは短頭鏃出現以前の古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる可能性が高い。

この段階の資料は、えびの盆地の地下式横穴墓に集中し、大口盆地および周辺の地下式板石室墓などにも見られる。

えびの市小木原・麻14号・20号地下式横穴墓、同市広畑(芋畑)1号・7号・11号地下式横穴墓にあり、小木原・麻遺跡では土壙墓から多数出土している。西諸県地域では西諸県郡高取原立切23号地下式横穴墓で唯一存在する。えびの盆地で生産された可能性を考えてよいのではないだろうか。

しかしながら、広畑(李畑)7号・11号、小木原・葦20号地下式横穴墓、鹿児島県大口市焼山5号地下式板石横穴室墓などでは鐵身下部が長身化した主頭鐵との共存例があり、鹿児島県薩摩郡さつま町別府原3号地下式板石横穴室墓では小型主頭鐵と短頭鐵、焼山6号地下式板石横穴室墓では二段逆刺鐵と共存する。よって、この段階の下限は古墳時代中期前半を一部含むと考えられる。続く第2段階とは連続的に移行したと考えられる。

地下式横穴墓 えびの盆地を中心として横口式土壙墓、平入り平天井地下式横穴墓が出現するが、数も少ない。時間幅も比較的短いと考えられる。えびの地域で限定的に生み出されたもので、出現期の地下式横穴墓ととらえられよう。

c. 第2段階

鉄鐵 短頭鐵など古墳時代中期前半に位置づけられる鉄鐵を出土した地下式横穴墓に、宮崎県北諸県郡高崎町原村上2号、西諸県郡野尻町大萩10号、西諸県郡高原町立切54・64号、岡町日守3・6・9号、旭台6・13・11号、小林市新田場6・7号、えびの市小木原・葦30・35・36・39・40・71号、島内36・39・82号、鹿児島県伊佐郡愛刈町前目灰塚地下式横穴墓などがある。実測図などの問題もあり不明瞭ながら、立切50・53・60号、新田場5号、などもその可能性が高い。高取原地下式横穴墓はこの段階の典型的な鉄鐵組成である。

地下式横穴墓 西諸県地域で築造数が急増し、平入り家形天井構造が主体となる。また、少数・点的であるが東は宮崎平野郡の国富町、南は鹿児島県の肝野平野、西は霧島山麓にも出現する。西諸県地域を中心としつつも、分布域を拡大し、本格的な横穴墓制としての地下式横穴墓の構造が確立する。家形玄室の採用に表される家葬觀念の導入という葬送觀念の変化は墓制改革の画期として位置づけられよう。広域流通財をもつものがみられるようになり、首長墓としても採用される。第1段階の出現期地下式横穴墓を祖型としつつ、新たな葬送觀念と横穴墓制の思想などの外的刺激が加わり、性格の転換があったものとみられる。本格的な地下式横穴墓の出現段階として、初期地下式横穴墓といえよう。

d. 第3段階

鉄鐵 長頭鐵出現段階であるが、長頭鐵が共存しない事例も多い。鐵身部が長身化した主頭鐵が主体を占め、中には長頭鐵の影響を受けた主頭鐵も存在する。

地下式横穴墓 大口・えびの盆地から宮崎平野でも一般化し、妻入り家形玄室構造なども加わり地域ごとに一定のまとまりを持ちながらも多様な地下式横穴墓が広域に形成されるようになる。また、築造数も激増する。地下式横穴墓の普及段階である。

e. 高取原地下式横穴墓の位置

これらの位置づけから見た場合、高取原地下式横穴墓は崩落によって天井部の構造が明らかでないが、鉄鐵の特徴、分布地域はまさに典型的な第2段階の資料であるといえよう。古墳時代中期前半に属するこの段階の良好な資料は、いまだ少なく、都城盆地内では現状で最も古く位置づけられる地下式横穴墓である。

この地域での出現期資料である高取原地下式横穴墓には在地産鉄鐵と広域流通する鉄鐵が副葬されていた。古墳時代中期前半、地下式横穴墓は古墳時代社会から閉ざされた閉鎖的な環境において成立したのではなく、広域に渡る情報・文物を入手できる立場にある被葬者が、先進的な埋葬形態の一つとして導入したのである。

高取原の地下式横穴墓に眠る被葬者は南九州に起こった新たな墓制を積極的に導入し、かつ近畿を中心とする古墳時代社会の情報や文物交流にも連なり、さらに在地的な鉄鐵生産などにも一定の影響力を持つような都城盆地内の在地首長の一人を想定するのがふさわしいであろう。

また、高城町には前方後円墳を3基含む牧ノ原古墳群がある。この古墳の築造時期に関する資料は現状では不明とせざるを得ないが、近年調査された周辺地下式横穴墓や木棺直葬墓の状況などからすれば、古墳時代中期を主体としているようである¹⁹⁾。踏み込んだ検討はできないが、高取原地下式横穴墓の被葬者と無関係ではなかった可能性が考えられる。宮崎内陸部の前方後円墳は高崎町塚原1号墳と牧ノ原の3古墳しかない。あるいは、高取原や西諸県地域の地下式横穴墓被葬者達が広域流通財を入手する背景・契機には、これらの前方後円墳被葬者を中心とした社会的紐帯に基づく、交易拠点の形成と外的交流があった可能性は想定して良いのではなかろうか。

結語

高取原地下式横穴墓出土の鉄鐵は、その組成が分析資料として優れているだけでなく、遺存状態にも恵まれ、編

部などにおいても貴重な情報が多数観察できた。個々の資料の研究に加え、地下式横穴墓の偏年の位置づけを考え、その展開を考察する上でも今後の基準資料となることは疑いないものと考え。本考察で言及できたことは、この資料がもつ価値のごく一部にとどまるものであり、今後、さまざまな議論の場で重要な役割を果たしうるものと考え。研究教育などのさまざまな場面の今後の活用に期待したい。

(橋本達也・藤井大祐)

【注】

- (1) ここで引用する高取原地下式横穴墓の鉄鏝はすべて本文参照。
- (2) 地下式横穴墓出土鉄鏝実測図は藤井2003に集成がなされているので参照。
- (3) 長津1992、北郷1993では牧ノ原古墳群の前方後円墳を古墳時代後期に位置づける。それは表探資料の埴輪や須恵器によっているらしいが、近年の高城町教育委員会が実施している周辺での調査出土資料からみると、そのほとんどが古墳時代中期を中心とすると考えてよい。

【引用文献】

- 鈴木一有1999『交易される鉄鏝』『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会
 長津宗重1992『日向』『前方後円墳集成 九州編』山川出版社
 橋本達也2003『副葬鉄器からみる古墳時代の南九州』『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会
 藤井大祐2003『南九州古墳時代鉄鏝集成』『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会
 北郷宗道1993『高城牧ノ原古墳群』『宮崎県史 資料編』考古2 宮崎県
 和田理啓2001『日向の地下式横穴』『九州の横穴墓と地下式横穴』九州前方後円墳研究会
 2002『宮崎の鉄鏝—その分布と流通について—』『考古学ジャーナル』496 ニュー・サイエンス社

【図版出典】(高取原地下式横穴墓出土資料を除く)

- 1・2・11：田中新史1995『古墳時代中期前半の鉄鏝(一)』『古代探査』IV 早稲田大学出版部
- 3・4・21：末永雅雄編1991『厩塚 鞍塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化協会
- 6：萬野和夫1990『入江先生を偲んで—香々地町碑古墳出土遺物—』『おおいと考古』第3集 大分県考古学会
- 7：宇治市教育委員会1991『宇治二子山古墳発掘調査報告』
- 8：古賀市教育委員会2004『永瀬遺跡—第1次・2次調査—』
- 9：浜松市博物館1998『千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群』浜松市教育委員会
- 10：八日市市教育委員会1996『雪野山古墳の研究』報告編
- 12・13：世田谷区教育委員会1999『野毛大塚古墳』
- 15：池畑耕一1990『高塚古墳の南限とその築造時期』『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 16・17：奈良県教育委員会1973『高塚九山古墳』奈良県文化財調査報告書第19集
- 18・19：森浩一編1990『園部埴内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊
- 20：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第23冊 瓦谷古墳群
- 22・23：田中新史2004『古墳時代中期前半の鉄鏝(3)』『土葬』第8号 土葬舎
- 26・27：田中新史1999『古墳時代中期前半の鉄鏝(2)』『土葬』第5号 土葬舎
- 28：浅羽町教育委員会1999『五ヶ山B2号墳』

報告書抄録

ふりがな	たかとりばるちかしきよこあなぼ							
書名	高取原地下式横穴墓							
シリーズ名	高城町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編集者名	近沢恒典							
編集機関	高城町教育委員会							
所在地	宮崎県北諸県郡高城町大字穂満坊46番地2							
発行年月日	2005年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
タカトリハラ 高取原 地下式横穴墓 (高取原遺跡)	タカシマノコウ 高城町 大字石山 3110番地	453439	4036	31° 50' 46" 付近	131° 07' 25" 付近	2002,9,12 ~ 2002,9,30	6.5m	農地陥没
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高取原 地下式横穴墓 (高取原遺跡)	地下式横穴墓	古墳時代		地下式横穴墓		鉄剣・鉄鏃		

高城町文化財調査報告書第19集

高取原地下式横穴墓

個人農地陥没に伴う埋蔵文化財発掘調査

2005年3月31日 発行

編集・発行 高城町教育委員会

宮崎県北諸県郡高城町大字穂積坊46番地2
郵便番号885-1202 電話番号0986-58-2317

印刷・製本 (有)アマガミ印刷

宮崎県北諸県郡高城町大字穂積坊114番地4
郵便番号885-1202 電話番号0986-58-5851